

一般社団法人日本生態学会

ニュースレター

No.60

2023年5月

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 70 回日本生態学会仙台大会（ESJ70）開催報告	5
記事	
I. 一般社団法人日本生態学会 2023 年度定時総会、代議員会、各種委員会において 報告・承認・決議された事項.....	10
A. 報告事項.....	10
B. 審議事項.....	19
II. 第 70 回日本生態学会大会記録.....	24
III. 業務執行理事の選任について	27
IV. 代議員の欠員補充について	27
V. 書評依頼図書.....	27
書評.....	27
日本生態学会役員・代議員・委員一覧.....	29
京都大学生態学研究センターニュース	33

日本生態学会各賞候補者募集

第 22 回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本法人会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第 28 回「日本生態学会宮地賞」

生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 17 回「日本生態学会大島賞」

野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 2 名の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

第 12 回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後 4 年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、各々 5 万円の賞金が贈呈されます。

第 1 回「日本生態学会自然史研究振興賞」

生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している本法人の会員を対象とした賞です。自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から原則として 2 件の受賞者を選考し、各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<https://esj.ne.jp/esj/>) よりダウンロード
3. 送付先：
（電子メール） office@esj.ne.jp
（郵送）〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
（〇〇は応募する賞名を入れて下さい）
4. 締め切り日：2023 年 8 月 16 日（水）必着

日本生態学会賞規則

- 第1条 日本生態学会賞は、本法人会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下「委員会」）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本法人の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会宮地賞規則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下「宮地賞」という）は、生態学の優れた業績を挙げた本法人の若手会員で、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、本法人会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴（日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無及び会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

- また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会大島賞規則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下「大島賞」という）は、野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や本法人の会員歴（日本生態学会の会員歴を含む）にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は授賞式が行われる3か月前までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本法人の学会誌に投稿する。
- 第10条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）規則

- 第1条 日本生態学会奨励賞（以下「奨励賞」という）は、本法人の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候

- 補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第 5 条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は授賞式が行われる 3 か月前までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金 5 万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本法人の学会誌に投稿する。
- 第 10 条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

日本生態学会自然史研究振興賞規則

- 第 1 条 日本生態学会自然史研究振興賞は、生物の記載、分布、生活史など、地域の生物多様性情報の収集と公開を通して、生態学の基盤強化に寄与している本法人の会員を対象とし、自薦による応募者もしくは本法人会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として 2 件とする。
- 第 2 条 自然史研究振興賞受賞候補者を選考するため、自然史研究振興賞受賞候補者選考委員会（以下「委員会」という）を設ける。
- 第 3 条 委員会の委員は代議員の推薦により 4 名を選出する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は 2 年以内とし、毎年 2 名を改選する。ただし任期満了後 2 年間は再任されない。
- 第 4 条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。
- 第 5 条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第 6 条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を理事会に諮り、有効投票のうち 3 分の 2 以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、理事会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第 7 条 受賞者の決定は授賞式が行われる 3 ヶ月前までに行う。
- 第 8 条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および賞準備金より賞金 10 万円を贈呈する。
- 第 9 条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演する。
- 第 10 条 この規則の改訂は理事会の承認を得なければならない。

第70回日本生態学会 仙台大会 (ESJ70) 開催報告

細将貴 (大会企画委員会 前委員長)

第70回日本生態学会大会 (ESJ70) は、2023年3月17日～21日の5日間の日程で開催されました。本大会は、前半の4日間をオンライン形式で、最終日の授賞式および受賞講演のみをハイブリッド形式 (オンラインおよび現地開催) で開催するという、これまでにない開催形式をとりました。大きなトラブルもなく閉会を迎えることができたのは、大会企画委員会のみなさまによる入念な準備、大会実行委員会とアルバイトのみなさまによる完璧な進行、そして業者のみなさまによる充実のサポートあってのことでした。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

開催形式決定の経緯

まず最初に、ほぼ完全オンラインというESJ70の開催形式が決定された経緯を説明したいと思います。そもそも、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックが始まった2020年以降、ほかの多くの学会と同様に、日本生態学会も年大会の現地開催再開を希求してきました。実際、ESJ70直近のESJ69福岡大会では、現地開催への回帰とオンライン参加の両立を目指し、ハイブリッド大会の準備が進められてきました。ところが、COVID-19の蔓延状況悪化を鑑み、開催の一ヶ月前にESJ69は完全オンラインへの切り替えを余儀なくされました。ハイブリッド大会として十分に準備してきたことが奏功し、ESJ69はオンライン大会としてそれまでにない高い水準の成功を収めました。現地交流にかけた期待の喪失、水泡に帰した準備努力、そして多くの参加者にリスケジュールの負担をかけてしまった負い目が、多くの関係者にとってトラウマとなりました。私はこうした次第から、ESJ70は、開催形式が変更される可能性のない、準備の楽な大会を目指すことにしました。

準備の楽な大会。これは、ESJ70に至って初めて顕在化した目標ではありませんでした。日本生態学会では、年大会の規模拡大に伴い、その運営を学会員のボランティアでまかなう体制に限界がきています。年大会のオンライン化は、部分的であっても、大会実行委員会の負担を軽減するための有効な手段になりえます。オンライン大会の利点と欠点を見極めるためにも、ESJ70を廉価で充実したオンライン大会の成功事例として経験する必要があると、私は感じていました。日本生態学会における完全オンライン大会自体は、プログラムの大部分が中止されたESJ67を含め3回実施されてきましたが、その間にオンラインプラットフォームはどの業者においても技術的な改善を著しく遂げてきました。実際、ESJ69で採用されたONLINE CONFは大変に優れたUIをもつオンラインプラットフォームでした。しかしESJ69では現地開催の準備も並行して行われていたため、大会参加費に

会場費のキャンセル料が転嫁され、割高感が否めない結果になりました。大会参加者にリスケジュールのリスクや高いコストを負わせることなく、現時点で最高のオンライン大会を実施することは、「準備の楽な学会」の実施と一致していたのです。この方向性について、大澤剛士大会企画副委員長 (現在はESJ71大会企画委員長) と相談し、大会企画委員会としてESJ70の全面オンライン化を提案するという意見を固めました。ESJ69の閉会直後のことでした。

2022年4月11日にESJ70運営検討タスクフォース第1回会議が開催され、開催形式についての意見が交換されました。大会企画委員会による全面オンライン開催の提案に対しては、大会実行委員会を含め、その場では積極的な異議は出ませんでした。これは主に、たとえ大会企画の大部分を現地で開催するとしても、従来どおりに参加者間の交流を図ることは困難だという判断からだったと思います。参加者間の交流は、従来、主にポスター発表や懇親会、あるいは会場外での飲食を通して図られてきました。しかし、COVID-19が蔓延している限り、密を避けるためにポスター会場は莫大な広さを必要とし、用意することが物理的に困難です。また、複数名での飲食は、最も感染リスクの高い行為のひとつです。よって当時の状況では、大会の企画に現地開催部分があったとしても、ポスター発表と懇親会はオンラインにせざるを得ないと判断されたのでした。しかしながら、オンライン形式によって最も魅力が減じられるのも、ポスター発表と懇親会です。大会企画委員会には、オンラインで参加者間の交流を促進する方策を考えるという、難しいミッションが課されることになりました。

その後、理事会において、大会の最重要企画である授賞式と受賞講演だけは現地で開催する (また、オンラインで同時配信する) ことが提案され、決定に至りました。この判断は、COVID-19の蔓延状況がどのように変動しようとも、この部分だけなら参加者人数を容易に制限できるため、確実に現地で開催できるという見積もりによるものでした。

新しい試みについて

SpatialChatでのプレ企画・サテライト企画

ESJ69に引き続き、ESJ70でもオンライン交流会場としてSpatialChatの使用を予定していました。直接会って話す機会を代替するウェブサービスは他にもありますが、大会参加者における操作方法の慣れを考慮すると変更するのはリスクが高く、またSpatialChatと比較して卓越して優れたものが他にあるようでもなかったためです。SpatialChatに参加者を誘導し、交流を生み出す仕掛けを考える必要がありました。

SpatialChat の契約体系の都合により、契約期間は大会期間を含む一ヶ月間となりました。そこで、開会前の契約期間を利用し、SpatialChat に予め慣れ親しんでもらうことはできないかと考えました。そこで出てきたのが、大会とは別にプレ企画を立ててもらおうというアイデアです。結果的には、時間的な余裕がなくプレ企画を公募することはできませんでしたが、2 件のプレ企画を実施することができました。ひとつは、内々に話を通していたエコカップ 2023 実行委員会によるオンライン同窓会「エコカップ 2002-2022：熱き戦いを振り返る—そして新たな歴史へ」です。ESJ70 参加者に限らず、多くの関係者が集い、旧交を温める場となったようでした。

もうひとつのプレ企画は、「ダーウィンが来た！自然番組のウラ側」と題した講演会で、NHK「ダーウィンが来た！」番組制作チームによるものでした。この NHK のチームをお呼びした経緯は、まず、先方から研究者との交流機会を持ちたいということで学会にコンタクトがあり、以前にも縁があった大会企画委員長の私が対応し、企業展示と自由集会に関わっていただくことになったというものです。そうして、大会内でのこれらの企画の宣伝を兼ねた、プレ企画での講演会を打診し、実現した次第です。開会前日の午後ということで、とてもよいアイスブレイキングになったのではないかと思います。

生態学会の大会に関連したサテライト企画としては、従来、エコカップ実行委員会によるフットサル大会が開催されていました。COVID-19 の流行以降、内容をフォトコンテストに変更し、一部の会員の間では盛り上がりを見せていましたが、開催場所という大会との接点を失い、ほとんど独立のイベントになっているという状況がありました。そこで ESJ70 では早い時期から大会企画委員会とコンタクトを取り、ともに上手な連携の形を模索することになりました。オンライン同窓会もその一環でしたが、受賞作品を SpatialChat に掲示し、多くの大会参加者に見てもらおうという企画も実現しました。

エコカップ実行委員会によるフットサル大会以外には特に開催されてきませんでした。今回も、エコカップ 2023 として、フットサル大会の代わりにフォトコンテストが実施され、盛り上がりを見せていました。今後、エコカップ本来のフットサル大会が再開されるようになればフォトコンテストは開催されなくなるかもしれませんが、このような展示を含めたサテライト企画はぜひ何かの形で継続されていってほしいと思います。期間や場所、予算等の制限から離れたサテライト企画、特に大会前のプレ企画には、まだまだ可能性があると感じています。今後も、大会企画委員会や大会実行委員会との連携のもと、会員からユニークな企画が自発的に立案されていくことを期待しています。

ポスター発表形式の改善

大会プラットフォームとして ONLINE CONF を継続して使用することは、ほぼ既定路線でした。理由のひとつは、ESJ69 で多くの参加者が操作に慣れたはずであること。また、満足できる部分、改善してもらいたい部分がわかっているということも安心材料でした。そして何

より、継続して使用することを前提に ESJ69 での使用料を運営会社（アグリスマイル）に抑えていただいたという経緯がありました。そのため、大会企画委員会の最初の作業は、ONLINE CONF で新たに予定されていたアップデートをどのように活用するかを検討していくことになりました。

いくつかのアップデート予定のうち、特に歓迎するべき、そして大仕事になる予感を伴うものが、ポスター発表の一覧に新たに適用されるタイル表示でした。かねてより、オンラインでは多くのポスターを一望できないことへの不満が聞かれていました。このアップデートは、まさにこの不満を解消するものです。しかし一方で、ポスター発表一件あたりに割り振られる面積は当然ながら小さく、文字情報を含めることなどは可能そうに思えませんでした。そこで ESJ70 では、一覧表示のサムネイルとしてグラフィカルアブストラクトを採用することにしました。グラフィカルアブストラクトは、近年の論文投稿ではブラウザや SNS 上での広告用に用意を求められることも珍しくないため、大会参加者にとって必ずしも不慣れな表現ではなかったと思います。しかし、新たに作成してもらったコンテンツが追加されることになるため、発表者には負担増となる不安もありました。そのため、ポスター賞候補のポスター発表とすべての高校生ポスター発表に対してのみの義務に今回は留めました。結果的には、賞候補ではないポスター発表のほとんどにもグラフィカルアブストラクトは用意され、非常に一覧性に優れた表示が可能となりました。

グラフィカルアブストラクトの採用は、別のアイデアにつながりました。交流会場としての SpatialChat と大会プラットフォームの ONLINE CONF、特にそのポスター会場とをシームレスに行き来するための、通路の入り口にするというアイデアです。ポスターのグラフィカルアブストラクトを SpatialChat に貼り付け、そこから ONLINE CONF 上のポスター発表ページにリンクを張ったのでした（ちなみに、大会期間中、あまりに集客に苦勞されていた企業展示にも、同様の仕組みを急遽作成しました）。検討に割くことのできる時間が限られたため、必ずしもベストなデザインにはなりませんでした。が、用意した道具の組み合わせから考えられるアイデアとしては最良のものだっただろうと思います。より洗練された形で、今後の大会に活かされることを願います。

ポスター発表において参加者間の交流を促進することは、ESJ70 の企画委員会に課された最大の課題だったと言ってよいでしょう。対策は、ウェブカメラを通したリアルタイムでのコミュニケーションと、コメントを通した非同期コミュニケーションの両面から考えられました。リアルタイムのほうについては、ONLINE CONF にもともとあった意見交流場機能をより安易に利用できるよう、ポスターの一覧に発表者の在不在が表示されるように改良してもらいました。また、各ポスターのページでは、発表者が他の参加者と現在交流中であるかどうかを表示する仕組みを追加していただき、人だかりのできるポスターにありがちだった、他の参加者同士のかけあいに自然に入り込むことを可能にしました。こうした仕

組みにより、オンライン発表で損なわれがちな交流が、多少なりとも補償されたことと思います。ただ、後述するように、この新機能にトラブルが発生したことは大変遺憾なことでした。

「いいね！」賞とベストディスカッサー賞

文字情報で残されるコメントの応酬は、オンラインでのポスター発表における最大の利点だと思います。対面の場合にはその場限りで揮発する良質の質問が文章として練られ、その後の聴衆にも参照可能な形で残されます。発表者は、質問の内容も質問者の名前も、あとで思い出せなくなるリスクから開放されます。コメントを残すインセンティブを参加者に与えることができないかと考えた結果、本大会で初めて設けられたのが、「いいね！」賞とベストディスカッサー賞でした。通常、発表賞の類は若手を奨励することを目的としますが、これらの賞は大会を盛り上げることを目的としています。よって受賞資格に年齢等の制限を設けませんでした。個人的には、本大会の目玉企画だったと思っています。

「いいね！」賞は、ポスター発表に対して参加者が与えた票の数によって発表者を称える賞です。通常のポスター賞では、専門性の合致した審査員によって審査がおこなわれるのですが、「いいね！」賞を審査するのはすべての大会参加者（高校生を含む）です。また、審査対象は、ポスター賞の受賞候補となっていない発表や、高校生ポスター発表を含みます。ポスター賞への応募資格を持たない発表者にも門戸を開くことで、広く発表者のモチベーションを高める効果が期待できます。結果として、ポスター賞に応募しておらず、発表日が二日目と不利だったはずの発表が一件受賞するなど、企画した者としてうれしい番狂わせがありました。また、通常のポスター発表の受賞者と一部が重複するなど、後述の議論にもつながる結果も得られました。

ベストディスカッサー賞は、発表にコメントした人に与えられる賞です。残されたコメントに対して、発表者や後に来た他の聴衆が、いい質問だと評価を込めて投じた票の数によって選定されます。多くの質問をすること、よい質問をすることへのインセンティブを高めることにより、ポスター発表の意義を深め、更には大会を盛り上げることを意図しました。結果として、使命感の強い企画委員が複数名受賞することになりましたが、個人的には、こうした発表賞の類で蚊帳の外に置かれがちなシニアの学会員が受賞し、存在感をアピールしてくれたことが、大変うれしかったです。

ちなみに、「いいね！」賞を設けた意図のひとつとして、従来のポスター賞との比較がありました。通常のポスター賞の審査には、審査員の負担が大きいことや、審査員を選定する際の都合により発表分野を柔軟に変更できないことといった問題があります。そこで、大会運営の省力化のため、審査を参加者全員による投票で済ませられないかという案が検討されています。その場合には、専門家による審査結果と、一般の参加者による審査結果が、ある程度一致していなくてははいけません。今回、「いいね！」賞とポスター賞の重複受賞者が複数名現れたこと

は、一般参加者による審査の有効性を示唆している可能性があります。一方で、「いいね！」賞は、ポスター賞とは異なる性格の賞として存続してほしいという声も聞かれました。あるいは、一般の参加者による審査結果を専門家による判断に活かすという方法もありえるかもしれません。いずれにしても、今後の大会運営方法を考えるにあたって、有意義な試みができたと感じています。

「いいね！」賞とベストディスカッサー賞は意図した効果を発揮できたのでしょうか。集計の結果、ESJ70ではポスター一件あたりのコメント数が、ESJ69と比べて全体の平均で10%以上、特にポスター賞候補の発表では15%、増加しました。ONLINE CONFの操作に大会参加者が慣れた効果もあるかもしれませんが、少なくとも、ESJ70では、ポスター発表での満足度を高めることができたものと考えています。

口頭発表形式の改善

今回、一般発表の口頭発表においては動画の事前アップロードを求めることにしました。これは、ESJ69で実施された見逃し配信では、発表当日に録画したものを編集し、公開するまでに1週間ほどの時間が必要であったため、見逃し配信が十分には利用されなかったという反省から考案されたものです。また、発表者の当日のネット環境に左右されることなく、タイムスケジュール通りに発表プログラムを進行できるという利点もありました。義務としなかったのは、初めての試みであり、発表者によっては大きな負担となる可能性があったためです。結果として、非常に円滑な大会の進行が可能になりました。発表にライブ感が欠けてしまったことを残念に感じる声も聞かれましたが、大会運営の省力化という意味では大きな改善だったと思います。

お詫び

大会会期中、大きなトラブルは確かにありませんでしたが、不手際がまったくなかったわけではありませんでした。お詫びするとともに、今後に活かしていただくために詳細の説明を残しておきたいと思います。

まず、SpatialChatの利用について。上述の通り、ESJ70ではSpatialChatでプレ企画をおこない、開会の前に場を温めておくことを構想していました。大会期間の外のイベントですので、必ずしも大会参加者のみに利用を制限する必要がなく、広い意味で生態学の関係者が交流する場を用意できるはずでした。しかしながらプレ企画は2件に留まり、交流を活性化するような効果は得られなかったと思います。また、プレ企画では大会非参加者にも入室できるようパスワード等を設定していませんでしたが、開会以降は大会参加者に利用を限定するために、特定のURLから登録する必要があるよう設定を変更しました。この変更については、参加者全員に対するアナウンスで開会前に注意喚起を行いましたが、十分には行き渡らず、大会初日にはSpatialChatに入室できないという問い合わせが非常に多く寄せられることとなりました。対策として、大会非参加者のうち開会以前に

ESJ70 用の SpatialChat の URL を知った人はそう多くないだろうとの判断のもと、大会 2 日目には設定を再度変更し、登録なしで入室できるように戻しました。入室についての問題はこれで一応解決しましたが、大会初日には同時に別の不手際も露呈しました。SpatialChat 内に一般講演のカテゴリーに対応した部屋を用意していなかったため、講演の空き時間や昼食休憩に多くの参加者が行き場所に迷ってしまったのです。ポスター発表のグラフィカルアブストラクトを貼った部屋に誘導するつもりが、部屋数が多すぎたために、人を集める場所として機能しなかったということのようでした。そこで急遽「雑談部屋」を作成したところ多くの人が集まるようになり、「顧客が本当に必要だったもの」はこれだったかと落胆したものでした。貴重な交流機会を減らす結果となり、申し訳なく思っています。

次に、ポスター発表における意見交流場機能について。先述したように、ESJ70 では ONLINE CONF のアップデートにより、ポスター発表の意見交流場に発表者が待機中であるかどうかが一覧表示から判別できるようになっていました。ところが、新機能ゆえのバグにより、発表者が待機を開始してから連続して 1 時間が経過すると、自動的に待機中の表示がキャンセルされてしまうという不具合が大会初日に発生してしまいました。不具合の発生はアグリスマイルにより再現性が確認されましたが、当初は原因がわからず、発表者には対症療法として一旦ログアウトしてもらうなどといった方策を伝えることで精一杯でした。原因が判明したため大会二日目には解消されましたが、初日の発表者には多くの不利益を生じてしまったことと思います。大会企画委員会として痛恨であり、心よりお詫びいたします。

大会の全体像と参加者、講演数、集会数

今大会は、一般講演は 887 件（ポスター発表：654 件、口頭発表：233）、高校生ポスター発表は 65 件、集会は 40 件（シンポジウム：10 件、自由集会：20 件、フォーラム：10 件）となりました。例年と異なる傾向があったのはポスター発表とシンポジウムの減少ですが、これらは同じく当初からオンライン大会が予定され実行された ESJ68 岡山大会でも見られた傾向です。オンライン大会が敬遠された結果と考えるべきでしょう。また高校生ポスター発表の増加が見られましたが、これは大会参加に移動を必要としないオンライン大会であったことが好まれた可能性もあるものの、高校生ポスター賞の選考対象としない発表であれば一校から二件目以降の発表申し込みを認めるという今大会からの規則変更による可能性もあります。

また、参加者数は 2490 人（一般参加者：1005 人、有料の学生参加者：746 人、招待講演者が 31 人、発表のない学部生と高校生をあわせて 699 人、その他 19 人）となりました。大会参加費を廉価に抑えた割には有料での大会参加者数が伸び悩み、例年よりやや減少した印象です。現地開催の大会が増えつつあるなか、オンラインのみの大会ではニーズを拾いきれなくなっている可能性

を示唆しているように思います。

展望

以上のように、本大会では多くの新しい試みをおこない、オンライン大会としてはベストを尽くしました。一方で、オンラインでは絶対に補うことのできない現地開催の良さも浮き彫りになってきました。今後、日本生態学会の年大会も、基本形を現地開催に戻していくことでしょう。しかし、育児や介護で家庭を離れがたい会員や、高校生・学部生にとり、出張を必要としないオンラインでの大会参加は、望ましいオプションであることに変わりありません。大会開催費用の増大と大会運営の省力化という大きな問題を抱え、妥協点を探りながらということになるかと思いますが、ハイブリッド大会となる ESJ71 の挑戦が実り多い物になることを今から祈念しています。

謝辞

最後になりましたが、今大会の準備と運営にあたりお世話になった以下の方々に厚く御礼申し上げます。

河田雅圭さん（大会会長）、彦坂幸毅さん（大会実行委員長）をはじめとする仙台大会実行委員会のみなさま、実行委員会の大澤剛士さん（大会企画副委員長）、才木真太郎さん（運営部会長）、冨松元さん（発表編成部会長）、大館智志さん（シンポジウム部会長）、服部充さん（ポスター部会長）、望月昂さん（高校生ポスター部会長）、辰巳晋一さん（英語セッション部会長）をはじめとする大会企画委員のみなさま、学会執行部、事務局のみなさまに心から感謝いたします。なかでも、ESJ71 への接続を見越して関与していただいた大澤さんと、私の至らなさを完璧にカバーしてくださった才木さんには感謝してもしきれません。また、直接的ではありませんが、ESJ70 の下地を整えてくださった高橋佑磨さん（前企画委員長）にも感謝申し上げたいと思います。ESJ69 から ESJ71 にかけて、このように歴代の企画委員長は情報と問題意識を共有し、大会のあり方を変革してきています。大会のあり方に正解はありませんが、今後も、少しでも多くの参加者と運営にとって満足度の高い大会になっていくことを祈念しています。

各種審査員を務めてくださったみなさまにも感謝申し上げます（順不同、敬称略）。

ポスター賞：別所和博、向井裕美、久野真純、伊藤健二、宮本麻子、速水将人、入江貴博、佐々木章晴、中野光議、馬場友希、河端雄毅、森茂太、豆野皓太、中臺亮介、Sam Ross、川西基博、仲澤剛史、原村隆司、益子美由希、藤本真悟、長谷和子、黒川瞬、柴崎祥太、相澤章仁、佐藤拓哉、井出純哉、佐橋玄記、松村健太郎、長谷川元洋、上田実希、石塚真太郎、庄山紀久子、豊田鮎、内海邑、宮崎智史、槐ちがや、前野浩太郎、戸田求、濱尾章二、井田崇、小野清美、安藤温子、三宅崇、上原歩、河村和洋、

栗和田隆、川坂健人、植村慎吾、山ノ内崇志、吉岡明良、大竹裕里恵、森嶋佳織、大窪久美子、岸本年郎、石原正恵、西川潮、北西滋、荒木良太、荒木希和子、工藤洋、日室千尋、河内香織、大崎遥花、衣笠利彦、伊藤公一、小山明日香、今西亜友美、内田圭、浜端朋子、東川航、吉川正人、増田太郎、石井弓美子、東出大志、和田葉子、片山昇、蘇智慧、今野浩太郎、伊藤浩二、竹内勇一、太田菜央、太田真人、三村真紀子、佐々本章晴、長坂有、沢田こずえ、他匿名希望 38 名

英語口頭発表賞：David Armitage、Jamie M. Kass、伊東宏樹、丑丸敦史、永松大、柿岡諒、久米篤、戸田求、佐藤幸恵、才木真太郎、小山里奈、小峰浩隆、小野田雄介、深谷肇一、菅井徹人、青柳亮太、石崎智美、前野浩太郎、村瀬偉紀、大串隆之、大戸夢木、潮雅之、土松隆志、東若菜、米谷絹代、北野潤、野村翔太、鈴木紅葉

高校生ポスター賞：武田和也、松本哲也、篠原直登、都築洋一、大崎晴菜、上田るい、大竹裕里恵、向井裕美、鏡味麻衣子、桜井良、小峰浩隆、内田健太、篠田悠心、坂田ゆず、小林慧人、池本美都、城野哲平、奥田圭、藤本真悟、中濱直之、小山明日香、早坂大亮、中原亨、山口諒、田川一希、宮崎佑介、山崎曜、木下豪太、青木大輔、佐賀達矢、宮田理恵、嶋田正和、西脇亜也、三宅崇

記 事

I. 一般社団法人日本生態学会 2023 年度定時総会（第 70 回大会会員総会、2023 年 3 月 21 日、代議員 22 名・会員 135 名参加）および代議員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2022 年度会員数・学会誌発行状況

日本生態学会誌 72 巻

	1 号	2 号
発行部数	310	340
配本部数	309	311
残部数	1	29

保全生態学研究 27 巻

	1 号	2 号
発行部数	870	860
配本部数	838	845
残部数	32	15

Ecological Research Vol.37

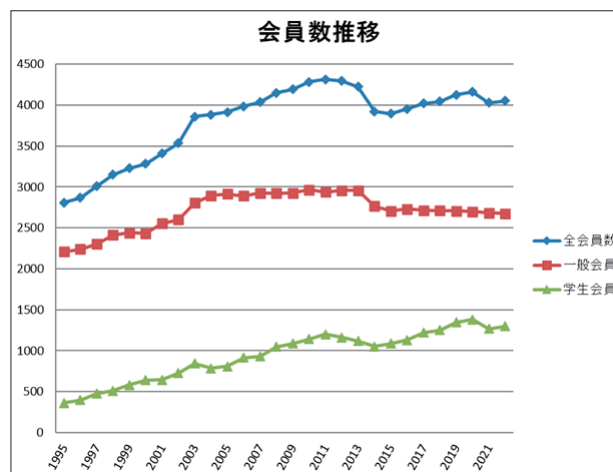
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	110	110	110	110	110	110
配本部数	108	106	107	106	106	108
残部数	2	4	3	4	4	2

会員数

	2021 年 12 月末現在			2022 年 12 月末現在		
	一般	学生	合計	一般	学生	合計
北海道	256	145	401	254	137	391
東北	164	101	265	170	103	273
関東	992	380	1372	985	431	1416
中部	355	171	526	353	165	518
近畿	465	306	771	454	307	761
中四国	185	63	248	188	61	249
九州	225	89	314	230	91	321
外国	42	14	56	42	6	48
小計	2684	1269	3953	2676	1301	3977
賛助			70			67
名誉			7			7
小計			77			74
合計			4030			4051

会費納入率（各年 12 月末現在）

	2021 年		2022 年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	94.5	72.4	92.5	76.6
東北	96.3	71.3	92.9	71.8
関東	93.3	70.8	93.6	71.9
中部	92.1	69.0	90.1	72.1
近畿	93.3	74.8	94.5	76.9
中四国	95.1	74.6	95.7	73.8
九州	94.2	67.4	95.7	79.1
海外	59.5	35.7	59.5	16.7
全体	93.1	71.3	92.9	73.9



b. 庶務報告（2022 年 4 月～ 2023 年 3 月）

- 日本学術振興会より令和 4 年度科研費（国際情報発信強化 A）の内定通知があった（H30 年度より 5 年間交付、令和 3 年度 12,600,000 円）（4 月 1 日）
法務局に 2022 年定時総会および 2022 年特別理事会にて就任した代表理事・理事・監事交代を申請し登記された（4 月 12 日）
 - 日本学術振興会へ令和 3 年度科研費（国際情報発信強化 A）実績報告書を送付した（5 月 12 日）
 - 生態学琵琶湖賞候補者募集を開始した（9 月 1 日）
 - 学術振興会に令和 5 年度科研費（国際情報発信強化 B・OA 刊行支援）計画調査など応募書類一式を送付した。（10 月 4 日）
 - 大学改革支援・学位授与機構へ大学機関別認証評価委員会専門委員候補者 8 名を推薦した（11 月 2 日）
 - 学会賞選考委員に推薦された宮地賞・大島賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が理事会メール審議にて承認された（11 月 23 日）
- * 他、各種集会への後援・共催名義使用承認 8 件、賞・助成への学会推薦 4 件

c. 会計報告（2022 年 3 月～ 2023 年 2 月）

- 福岡コンベンションセンターへ ESJ69 福岡国際会議場使用料およびキャンセル料として 2,008,115 円を支払った（3 月 25 日）
- 新協社へ ESJ69Zoom オペレーション委託費として 3,157,000 円を支払った（3 月 30 日）
- Wiley 社へ 2022 年英文 3 誌発行費として 717,624 円を支払った（4 月 5 日）
- 2022 年地区会活動費を各地区会に送金した（6 月 3 日）
- 国際文献社へ ESJ69 大会関連委託費として 4,546,249 円を支払った（6 月 13 日）
- AGRI SMIL へ ESJ69 プラットフォーム利用料として 2,344,828 円を支払った（6 月 15 日）
- 国際文献社へ会員管理委託費 4～6 月 3,121,440 円を支払った（7 月 13 日）
- 科研費（国際情報発信力強化）前期分として 6,600,000 円の入金があった（7 月 20 日）

9. 東京化学同人より生態学入門第2版印税として431,200 円の入金があった（7 月 25 日）
10. 国際文献社へ東北地区・九州地区ウェブ選挙費用として242,000 円を支払った（8 月 5 日）
11. 国際文献社へ会員管理委託費7～9 月239,551 円を支払った（10 月 13 日）
12. MIERUNE 社へ新サーバへの移転作業費用として396,000 円を支払った（10 月 20 日）
13. 科研費（国際情報発信力強化）後期分として6,000,000 円の入金があった（10 月 28 日）
14. ESJ70 交流ツール SpatialChat 使用料として1,056,371 円を支払った（11 月 25 日）
15. イギリス生態学会ブース出展機器レンタル費用として335,746 円を支払った（12 月 2 日）
16. みずほファクターより2023 年会費口座自動引落分として3,213,910 円の入金があった（12 月 12 日）
17. 土倉事務所へ日本生態学会誌72-1・2 印刷費およびニュースレター No.58 編集費として1,857,295 円を支払った（12 月 20 日）
18. 国際文献社へ会員管理委託費2022 年10-12 月分として818,730 円を支払った（1 月 18 日）
19. 土倉事務所へ保全生態学研究27-1・2 印刷費として2,682,845 円を支払った（1 月 20 日）
20. 東京化学同人より生態学入門2 版出版印税として508,480 円の入金があった（1 月 25 日）
21. 2022 年度の会計監査が Web 会議システム（Zoom）で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。（2 月 9 日）
22. 2022 年法人税として209,300 円を納税した（2 月 10 日）

2. 大会企画委員会

概要

- ・ほぼ完全オンライン（授賞式と受賞講演のみ現地開催でハイブリッド）
- ・大会プラットフォームとして ONLINE CONF を使用
- ・交流ツールとして SpatialChat を使用

これまでとの大きな変更点

- ・口頭発表における、講演動画の事前アップロード
- ・ポスター発表における、グラフィカルアブストラクトの採用と一覧表示
- ・ポスター発表における、「いいね！」賞とベストディスプレイ賞の新設
- ・ポスター賞候補における、グラフィカルアブストラクトと説明動画の義務化
- ・SpatialChat を利用したポスター発表の拡張
- ・ほぼすべての講演の即時オンデマンド配信。

申込状況

回	開催地	一般講演			ポスター 高校生	集会				
		ポスター	口頭	合計		シンポ	フォーラム	企画集会	自由集会	合計
61	広島	944	214	1158	55	17	7	25	30	79
62	鹿児島	866	166	1032	29	12	11	19	29	71
63	仙台	914	251	1165	40	4	13	24	37	78
64	東京	955	264	1219	52	14	9	17	35	75
65	札幌	899	216	1115	45	19	7	17	29	72
66	神戸	918	269	1187	81	21	12	-	32	65
67	名古屋	928	295	1223	60	31	7	-	29	67
68	岡山	708	224	932	35	17	11	-	20	48
69	福岡	848	235	1083	49	28	9	-	23	60
70	仙台	654	233	887	65	10	10	-	20	40

回	開催地	参加者			
		一般 (有料)	学生 (有料)	その他	合計
61	広島	1278	684	502	2464
62	鹿児島	1104	661	330	2095
63	仙台	1241	686	469	2396
64	東京	1262	828	724	2814
65	札幌	1140	745	421	2306
66	神戸	1187	816	796	2799
67	名古屋	874	734	299	1907
68	岡山	1110	799	803	2712
69	福岡	1093	861	758	2712
70	仙台	1005	736	749	2490

- ・参加費を低く抑えることができたが、参加者数はあまり伸びなかった。
- ・一般発表件数は減少。ポスター数のみが減ったように見えるが、昨年度は口頭発表をポスター発表に移すことで口頭発表数を調整していたため、単純には比較できない。
- ・高校生ポスターはやや増加。
- ・シンポジウムは大きく減少。

大会の様相

- ・ポスター発表のコメント欄は、昨年度より活況だった。
- ・問い合わせ件数では、SpatialChat への入室方法に関するもの（private 設定にしていたことに起因）が多かった。
- ・ONLINE CONF へのログインに関するもの、ONLINE CONF の不具合に関するもの、
- ・問い合わせによって発覚した ONLINE CONF の不具合（ビデオ機能の「意見交流会」で発表者が待機中であることを示す表示が、使用一時間を経過すると自動的に不在を示す表示に変更されてしまうというもの）は、2 日目開始前には解消されたものの、ポスター賞に応募した発表者らの体験として残念なものだった。
- ・SpatialChat からポスター発表に人を誘導する試みは、あまり成功しなかった。

- ・公開講演会の発表者が全員男性であったことは反省点。

今後の課題（次期大会企画委員会および ESJ71 TF へ）

- ・発表分野区分の統廃合
- ・ポスター部会長より、分野区分を統廃合する作業は部会の手之余のため、TF で決定してほしいとの意見が出ている。
- ・部会の再編
- ・人海戦術でポスター賞の審査を頼むという仕事があるため、ポスター部会は構成員人数が多い。そのため、部会の意思決定が非常に遅い。ポスター賞の審査方法やコンテンツの諸々など、ポスター発表に関わる決定権を、運営部会か大会企画委員長に移譲したほうがよい。
- ・ONLINE CONF や SpatialChat など、オンライン部分を担当する部会がないため、ノウハウがうまく引き継がれず、いたずらに企画委員長と運営部会長の負担が重くなってしまった。オンライン部会を設けることにより、ノウハウを蓄積していけることが望ましい。
- ・申込システム・プラットフォームの一本化
- ・申込みシステムとオンラインプラットフォームが別会社になっているため、申込情報を反映する二度手間により大会直前に時間を浪費している。また、余計な費用がかかっている。これらを解消するため、今後は国際文献社のプラットフォームを使用するか、申込受付に国際文献社のシステムを通さないことが望ましい。会費未納者による発表記録の事後取り消しなど、低コストで雑に管理する方法も検討してほしい。

（文責：細将貴）

3. Ecological Research 刊行協議会

1. 出版状況（2022 年第 37 巻 1 ～ 6 号の報告）

- ・計 799 ページ 80 報を出版。投稿数 244、受理数 80（採択率 31.9%）。総ページ数は 36 巻の 1036 ページより減少。
- ・投稿数の凋落傾向が顕著（2021 年 267、2020 年 263、2019 年 309、2018 年 342、2017 年 536）。特に国外からの投稿数の減少が目立つ。
- ・日本からの投稿数（75）は前年と同数。採択数は 56。70% が日本からの投稿。
- ・投稿から First Decision までは平均 39.3 日。前年値（40.9）よりやや短縮。
- ・IF 値（2021）は 2.056 に上昇（2020 年 1.917、2019 年 1.580、2018 年 1.546、2017 年 1.531）。2022 Journal Citation Reports（Clarivate Analytics）では Ecology カテゴリーで 121/174 と昨年（112/166）よりも順位は下落。
- ・オープンアクセス（OA）論文は 19 報（23.8%、2021 年は 16.3%）（有利な出版契約のため、さらなる増加が望ましい）。
- ・日本人査読者の割合が高くなってきており（2021

年 60.5%、2020 年 55.6%、2019 年 53.5%、2018 年 38.4%、2017 年 37.8%）、最近では実際の査読者の 7 割を超える。国際誌として改善の必要。

2. 編集体制

- ・新規編集委員、特に海外編集委員を募集中。しかし、苦戦。
- ・5 名の新任、5 名の退任。

3. Ecological Research Award 2022 受賞論文選考

- ・編集委員・幹事の投票により 5 論文を選考し、理事会の承認を経て決定した。

4. 特集企画

- ・37 巻 1 号に “Blue carbon dynamics in coastal habitats: their role in climate change mitigation and ecosystem function” 全 6 報掲載。この続編が 2023 年以降に発行予定。
- ・37 巻 4 号に “Promoting idea sharing via Idea Paper 2” 全 8 報掲載。
- ・このほかに 38 巻 1 号で Cedar 特集、全 6 報が出版済み。Beech 特集前編（全 5 報）が 38 巻 2 号に掲載予定。
- ・他 2 特集（Blue carbon 特集後編、Beech 特集後半）が編集集中。
- ・covid-19 により開催が延期された国際学会に関連した 2 特集が予定。2020 年酸性雨国際会議（ACID RAIN 2020）の特集が Aerosol and Air Quality Research 誌との共同企画とし準備中。The 10th International Conference on Serpentine in France の Proceedings が蛇紋岩特集として予定されている。
- ・今後掲載論文数が不足する懸念がある。特集の企画立案、論文投稿をお願いしたい。
- ・特集内の 1 報は生態学会負担でのオープンアクセスになる。

5. Author Guidelines の一部変更等

- ・References セクションで、Wiley Journal's Style Manual へのリンクと参照ページを削除。
- ・投稿の項目に、Graphical abstract figure and text の項目を追加。
- ・The under review service（Authorea）についての記述を追加。
- ・AI の論文への使用について The Committee on Publication Ethics（COPE）で指針が明示。AI にオーサーシップは認められず、論文作成に使用の場合、論文内に記載が必要。これを受けて Author Guidelines も改訂予定。

6. OA 費補助について

- ・生態学会員が corresponding author で ER 誌に論文が受理された場合の、学会からの OA 出版補助開始の予定。

（文責：鈴木準一郎）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

新たな任期（2023–2025 年）の編集委員会（委員長・幹事は留任、委員は 3 名退任・2 名新任）となりました。刊行協議会を 2023 年 2 月 11 日にオンライン開催しま

した。12名の編集委員長・幹事・委員、和文誌事務局、保全生態学研究編集委員会幹事が参加し、和文誌事務局の充実、原著論文の位置づけ、社会科学分野の強化、連載の進め方、などについて議論しました。

【報告事項】

発行状況：73巻1号を2023年3月に発行します。学術情報4編（うち連載が2）を掲載する予定です。72巻から年2号（3月と9月）、冊子300部を発行し、冊子購読会員は年間2,000円、一般販売は2,500円/冊（保全誌と同額）となっています。

72巻（2022年）発行状況

	原著	総説	特集	学術情報	連載	その他	合計	頁数
1号	0	0	2 (13編)	0	0	0	13	107
2号	0	1	2 (9編)	0	0	0	10	107
計	0	1	4 (22編)	0	0	0	23	214

2021年71巻は3号126頁でした。2022年の発行頁数は持ち直しましたが、2010年代の400頁前後から減少しています。

編集状況（2023年3月2日）

受付年	段階	原著	総説	情報	コメ	合計
2020	審査中	0	0	0	0	0
	却下	1	2	0	0	3
	受理	5	4	11	6	26
	合計	6	6	11	6	29
2021	審査中	0	0	0	0	0
	却下	6	3	0	0	9
	受理	0	5	6	2	13
	合計	6	8	6	2	22
2022	審査中	0	4	3	1	8
	却下	0	0	0	0	0
	受理	0	0	3	0	3
	合計	0	4	6	1	11
2023	審査中	1	4	1	0	6
	却下	0	0	0	0	0
	受理	0	0	0	0	0
	合計	1	4	1	0	6

6つの特集が企画されており、2023年の投稿受付数は前年を上回ると見込まれます。2022年までの投稿受付数の減少は、学会大会の開催形式の変化によるのかもしれませんが。

和文誌事務局の充実

保全生態学研究とともに、和文誌事務局に新たに作業補助者を雇用し、受理原稿の校閲とJ-Stageへの登録などをしていただきます。

（文責：永光輝義）

5. 保全生態学研究刊行協議会

日時：2023年3月14日 9:00-10:00 zoom オンライン
参加者：小池、丑丸、西廣、大澤、北村、鈴木、小山、露崎、金子、横溝、東城、根岸、森田、戸田、五箇、片山、赤坂、楠本、今藤、市野川、橋口（事務）

議事

- 編集状況を報告した
- 投稿規程の変更を理事会に提案することとした。

変更点1（理事会承認事項）。生態学会会員に対する掲載料免除の上限ページ数について、保全情報や学術提案について現在6ページのところ原著論文、調査報告、実践報告などと同じ8ページまでとする。理由：「学術提案」では根拠文献を十分引用しながら議論すると原著論文などと同等かそれ以上のページ数が必要。「保全情報」において重要な外来種などの情報をまとめて紹介する場合は十分なページ数が必要。

変更点2. J-Stage DATAについてデータを文献表で引用するスタイルとする。

変更点3. スタイル変更。Webサイトの引用の確認日の表現を統一。

- 全文XMLについて
現在は書誌情報XMLであるが2023年度を目標にWordをもとにした全文XMLへの移行を目指す。主な目的は労力の削減。また機械翻訳の能力が将来的に向上すれば各種言語で発信される。

採用する場合のスケジュール：投稿規定の変更として、著者に校正を反映したWord原稿を作成依頼、その他の原稿スタイル変更の設計、などが必要。具体的な作業内容と投稿規定の変更などの詳細について夏秋に編集委員会で議論。労力削減のため校正の簡素化を検討する。

- アルバイト雇用、編集委員長交代スケジュール
増大するオンライン作業への対応や校正が主な仕事のアルバイト（博士課程学生、ポスドクなど）を全国で募集する。2～3ヶ月ごとに次期編集委員長と事務担当者とともに編集会議を行う。
- 投稿者向けのアンケートを行い、改善点を明らかにする

編集状況

1. 2023年1月～3月

	原著論文	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	・巻頭言 学術提案	計
2023 新規投稿	2	1	4	1	2	1	0	11
受理	0	0	0	0	0	0	0	0
却下・取下げ・ 話題不適当	0	0	0	0	0	0	0	0
審査中	2	1	4	1	2	1	0	11

2. 2022 年

	原著論文	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	・学術提言 ・巻頭言	計
2022 新規投稿	14	3	10	3	1	2	2	35
受理	3	2	5	1	1	2	2	16
却下・取下げ・ 話題不適当	2	0	1	1	0	0	0	4
審査中	9	1	4	1	0	0	0	15

2021 年新規投稿数 36 編：受理 30 編，却下・取り下げ 4 編，審査中 2 編

2020 年新規投稿数 45 編：受理 35 編，却下・取り下げ 10 編

(文責：小池文人)

6-1. 自然保護専門委員会

日 時：2023 年 3 月 10 日 09:00 - 11:25 リモート会議 (zoom) にて開催

出席者：露崎・黒沢・星崎・亘・奥山・増田・和田・古賀・中井・高嶋・久保田・増澤・加藤・清水・横畑・常田・水谷・矢原・吉田・村上・安溪・角野・神山・大久保・五箇・関島 (26 名)

【審議事項】

- 2022 年度事業の決算について
- 2023 年度事業計画及び予算 (要望書作成・アフターケア活動費用等：100,000 円)
- 岐阜県御嵩町の環境省重要湿地およびハナノキ群生地におけるリニア発生土置き場設置計画の見直しを求める要望書 (案) について
- 垂水風力発電事業計画に対する要望書の作成 (対応) について
- 奄美大島嘉徳海岸における護岸建設計画に対する要望書提出後の対応について
- ホームページの運用について (<https://esjncc2022.wixsite.com/esjncc>)
- その他

【報告事項】

- 自然保護専門委員会の活動報告 (2022 年度)
 - 苫東厚真風力発電事業計画の中止を求める要望書 (2022 年 3 月総会決議) の提出
 - 奄美大島嘉徳海岸における護岸建設計画に対する要望書 (2022 年 3 月理事会決議) の提出とその後の対応 (アフターケア)
 - 再生可能エネルギー事業対策作業部会の設置
 - ホームページの開設
 - 日本生態学会第 70 回大会 (福岡大会) でのフォーラム開催について
- 地区会報告
 - 中国・四国地区、近畿地区の活動報告
- 作業部会・アフターケア委員会報告
 - 外来種問題検討作業部会の会議報告
 - 再生可能エネルギー事業対策作業部会の会議報告

・上関要望書 AC 委員会、京都亀岡市アユモドキ問題、魚釣島ヤギ問題の各アフターケア委員会報告

4. その他

(文責：和田直也)

6-2. 自然保護専門委員会外来種対策作業部会

日 時：2023 年 3 月 7 日 17 時～18 時 30 分 リモート会議にて開催

出席者：佐藤重穂、池田透、戸田光彦、常田邦彦、森本信生、増澤武弘、中井克樹、安田泰輔、片岡友美、村上興正、川上和人、小池文人、橋本琢磨、岩崎敬二、坂本洋典、五箇公一 (16 名)、(オブザーバー) 亘悠哉

【審議事項】

- 生態学会・侵略的外来種ワースト 100 リストの見直しについて
 - 2022 年度中に学会事務局宛に表記リストにおける「ノネコ」「ノラネコ」「飼い猫」の扱いの違いについて、および、コイがリストに入っていないことについての質問が寄せられ、本部会内で協議して回答文を作成
 - 今回の問い合わせからも、リストが老朽化しており、外来種問題の変遷および科学的知見に合わせて、リストの随時更新が必要と判断。
 - 国の外来生物法・特定外来生物および生態系被害防止外来種リストを基幹としながら、これらリストから漏れている重要性の高い種 (特に海産生物が手薄) をカバーした生態学的視点に立った独自のリストを作成すべき。
 - 島嶼や世界遺産エリアなど、地域性を反映したリストの作成も重要と判断
 - これらのリストのポータルサイトとして国立環境研究所の侵入生物データベースを活用することも提案
- 生物多様性新国家戦略における外来生物対策指針について
 - ポスト 2020 年目標に掲げられた「外来生物の定着率を半減」とする外来生物対策方針について、まず検疫機能の強化および各種外来種情報・革新的防除技術の省庁間の共有が必要
 - 農業分野では植物防疫法が検疫を所管するが、水産分野では輸入水産物貿易による外来種移入の防止を所管する regulation システムが現状ない。国家戦略の課題として「海の外来生物対策」の強化も盛り込む必要がある。
 - 海産外来生物を課題とした研究の強化、成果発信が学術分野の課題。
 - 環境省の小委員会でも学会意見として提議すべき。
- 部会メンバーの更新について
 - 若手・実践派の参加
 - 特に海産生物類や植物類の専門家が不足気味

【報告事項】

- 各種外来生物対策の実情報告
 - 哺乳類、鳥類、爬虫両生類、魚類、昆虫類、植物、海産生物類の各種外来種についての侵入実態、防除

の進捗、および今後の課題について報告。

2. 環境省・感染症対策（ワンヘルス）事業の報告
・環境省、厚労省、農水省の有識者合同による「野生鳥獣に関する感染症対策としての鳥獣保護管理方針検討会」が開始され、当面の課題としてツシマヤマネコ（対 SFTS）やヤンバルクイナ（対鳥インフルエンザ）などの希少種に対する感染症リスク対策の検討を進めている。

（文責：五箇公一）

6-3. 自然保護専門委員会再生可能エネルギー事業対策作業部会

日 時：2023 年 3 月 9 日 17：00 ～ 19：00 zoom 開催
出席者：関島・吉田・露崎・由井・和田・西田・石濱・鎌田・風間・浦・上野・阿部・傘木（13 名）

【審議事項】

1. 作業部会の設立趣旨・目的について
作業部会の設立趣旨および目的を説明し、作業部会の趣旨・目的について了承を得た。
2. 作業部会における作業担当について
作業部会の主な役割として、①事業計画に対する要望・意見書の作成と、②改正温対法に基づく促進地域ゾーニングに係わる指導・アドバイスの 2 点があるが、作業部会メンバーの担当について提案され、了承された。
3. (仮称) 垂水風力発電事業計画に対する要望書の対応について
 - ① 本事業の計画および当該地の概況説明を奥山委員（科博）から紹介いただき、要望書の提出について審議した。審議の結果、今後、地区会から提出された自然環境情報を踏まえ、要望書作成に進むことができるか否かについて、地区会メンバーと検討することとした。
 - ② 本事業は演習林内に計画されており、供用された場合、演習林内の生態系を大きく改変させてしまう可能性もあることから、教育・研究上の問題点を学長等の管理者や全国大学演習林協議会等に理解を求める必要性も指摘された。
 - ③ ②を進める際には、自然史学会連合に協力を求めるなど、他学会との連携の必要性を求める意見もあった。
4. その他
本作業部会の目的の一つである「改正温対法に基づく促進地域ゾーニングに係わる指導・アドバイス」に関し、作業部会として再エネ設置を控えるエリアのゾーニングを提案してはどうかという意見があり、今後検討することとした。

【報告事項】

1. 生態学会フォーラムについて（資料 6 生態学会フォーラム）
第 70 回生態学会大会における自然保護専門委員会主催のフォーラムの内容が紹介された。
2. その他

（文責：関島恒夫）

7. 将来計画専門委員会

開催日時：2023 年 3 月 8 日（水）13:00-15:00

場 所：オンライン

出席者（敬称略）：石井、石川、巖佐、大竹、黒川、佐竹、佐藤、塩尻、田中、辻、土居、彦坂、藤岡、三木、山道、矢原

欠席者（敬称略）：粕谷、北島、小泉、酒井、鈴木、立木

オブザーバー：中野

報告事項

- (1) 若手支援
 - ・昨年度に引き続き「今日はモアイにいこう」をフォーラムとして企画し 44 名のメンターから応募があった。若手 WG メンバーによるメンター推薦により、多彩な経歴を持つメンター陣を揃えることができた。昨年度と同様に今年度も、個別の相談に加え spatial chat を活用し、複数人のメンターが揃った部屋を用意し会期中に誰でも自由に参加できる体制とした。
 - ・メンターとメンティーは、教員と学生間の関係でなく、教員間（あるいは学生間）の関係としても利用できる場として発展させると生態学コミュニティのさらなる活性化につながる可能性がある。次年度は、大会会場での実施（初！）を検討している。
- (2) 国際化と国際連携
 - ・国際学会のハイブリッド開催が一般的になり参加はしやすくなったものの、時差の問題がクローズアップされつつある。特に欧米の大会では、オンラインでのライブ講演への参加が難しい。類似した時間帯にあるアジア・オセアニアとの連携が今後より重要になるだろう。
 - ・国際組織・プロジェクトへの積極的な関与が引き続き必要。若手の海外渡航が減っているとの意見も。
- (3) 生態学関連分野の大型予算
 - ・生態学関連の大型予算として学術変革領域研究（A）が 2 つ動く。他分野では、継続した大型予算獲得が実現され、次世代育成にも役立っている。また、科研費には新しく国際先導研究も設置された。この機会を活かし、今後生態学分野の発展と国際化に必要な大型予算を、学会としても継続的かつ戦略的に獲得を目指す仕組みを考える場として、次年度には生態学会員、若手、女性研究者による挑戦を触発するようなフォーラムを企画したい。

（文責：佐竹暁子）

8. 生態教育専門委員会

総会に報告すべき事項

- 1) 委員の枠移動と新委員の就任
高校教員枠委員だった佐賀達矢氏が神戸大学に異動することに伴い教育学部枠委員となる。
新たな高校教育枠委員として矢追雄一（焼津中央高校）が就任した。
- 2) 2023 年度の計画
 1. 生態学会大会でのフォーラムの企画・開催

2. 一般教養向けの教科書「教養の生態学（仮）」の作成
3. SSH 生徒研究発表会での生態学会の広報活動
4. 日本生態学会誌での連載「生態教育の今と未来」の継続を行う。

総会への報告を要しない事項

2022 年度活動報告

1. オンライン合宿（2022.9.9）と大会前の打ち合わせ（2023.3.11）
 - ・生態学会大会のフォーラムの内容について検討した。本日 3 月 19 日に開催予定である。
 - ・執筆の進む「教養の生態学（仮）」の今後の進行について意見交換した。
 - ・連載「生態学の今と未来」の今後のテーマについて検討した。
2. 「教養の生態学（仮）」の作成
 - ・大学の一般教養や生態学の周辺領域の仕事に携わる方、生態学を専門としない理科教員など、生態学を専門としない方たち向けの生態学の教科書を 2023 年度に出版すべく、各章ないしセクションについて二人の執筆者に依頼し、そのうち一人が書いた原稿をもう一人が読み加筆修正する形で進めた。現在、これら原稿が集まったところで、委員会での査読を行う準備段階である。
3. 高校生対象の日本生態学会ならびに高校生ポスター発表の広報
 - ・SSH 生徒研究発表会は 2022 年度も、ブース出展ができなかったため、日本生態学会と高校生ポスターについてのチラシを作成し、チラシコーナーに置いていただいた。
4. 連載「生態教育の今と未来」
 - ・2022 年度は 1 回掲載し、2023 年度の内容・執筆者も選定済み、依頼済みである。

（文責 中田兼介）

9. 生態系管理専門委員会

2022 年度活動報告

会議を定例化（隔月オンライン開催）し、活動の活性化と部会連携強化。

○調査・提言部会

- ・提言論文「自然の賢明な活用を目指して：グリーンインフラ・NbS の推進における生態学的視点」を執筆し、保全生態学研究に掲載予定となった。
- ・ESJ70 でフォーラム開催。環境経済学、土木工学分野との意見交換を実施。

○キャパシティビルディング部会

- ・オンラインワークショップ「身近な生態系を取りこぼさない方法を考える - 生物多様性を受け継ぐ人と人とのつながりを増やすには？」開催（2023.1.21）。
- ・参加者 29 名（コンサル職員、研究者、学生など）＋スタッフ 9 名＋話題提供者 2 名。

2023 年度活動予定

○調査・提言部会

- ・2022 年度に出版した提言論文を活用した学会横断

的なシンポジウム・セミナー等の開催

○キャパシティビルディング部会

- ・オンラインワークショップ「自然を活かす。ともに生きる（仮題）」
- ・全国の生態系管理事例を紹介する動画フォーマットの作成、試行的な発信を開始

（文責：西廣淳）

10. 大規模長期生態学専門委員会

日 時：2023 年 2 月 28 日～3 月 15 日

方 法：委員間のメール交換と Zoom によるミーティング（3 月 15 日）

出席者：石原正恵（京都大学）、伊東明（大阪市大）、内海俊介（北海道大学）、大手信人（京都大学）、黒川紘子（森林総研）、木庭啓介（京都大学）、中村誠宏（北海道大学）、村岡裕由（岐阜大学）、中野伸一（京都大学）

【総会に報告すべき事項】

各種研究ネットワーク、プロジェクトの活動について

JaLTER（日本長期生態学研究ネットワーク）、DIWPA（DIVERSITAS in the Western Pacific and Asia、デジタルバイオスフェア（地球環境を守る統合生物圏科学）、APBON（アジア太平洋生物多様性観測ネットワーク）など、国内外のプロジェクト、ネットワークが研究活動を行っている。

JaLTER の活動について

コロナ禍の収束傾向を受けて、この 2 年間オンラインで開催されてきた、Open Science Meeting（OSM）と運営委員会が 2022 年 11 月 25 日に森林総合研究所小川サイトで開催された。この OSM は、小川サイトの開設 35 周年記念シンポジウム（24 日）のあとのフィールドツアーで、プロット調査に関するこれからの展望について議論された。

JaLTER データベースと生態学会における情報インフラの整備にむけて

昨年度の大規模長期専門委員会での議論をもとに、設置されたタスクフォース（TF）の議論をもとに、JaLTER データベースのシステムの更新と運用の安定化にむけた具体的な議論を開始した。文科省事業である DIAS（データ統合・解析システム）のプラットフォーム上に JaLTER データベースシステムを移し、運用を開始する計画の可能性を議論している。DIAS は地球科学、防災科学等のデータベース群を中心としたプラットフォームであるが、かねてから生態学、生物多様性科学のデータの充実を希望しており、この協力は双方にメリットがあると考えている。

【新年度の活動計画】

- ・JaLTER/ILTER
- ・Open Science Meeting（未定）2021 年 10 月中旬
- ・その他、各ネットワーク、プロジェクトの活動についての情報交換を随時行っていく。
- ・生態学会データベース検討タスクフォースを中心に

日本の生態学における情報インフラの整備方針を具体化する。

(文責：大手信人)

11. 野外安全管理専門委員会

日 時：2023 年 2 月 8 日～3 月 16 日 メールにて実施
参加者：飯島、大館、奥田、鈴木、粕谷、北村、石原、(中島)

2022 年度活動報告

- ・野外調査時の事故（2 件）についての情報を収集した。ヒグマ冬眠用の巣穴調査でのヒグマによる事故
- ・屋久島での院生の死亡事故(引き続き情報収集を行う)
- ・九大生の野外実習時における水死事故訴訟についての情報を収集した。
- ・2016 年 9 月に屋久島で行われた九大のフィールドワーク科目の実習において、引率した教授は、学生に川への入水を指示した。その際に救命胴衣を着用させず、参加者 2 人がおぼれた。このうち死亡した男子学生は約 1 時間後に下流で発見された。福岡地裁は大学の過失を認めて、国家賠償法に基づき、大学に約 7700 万円の賠償を命じた。
- ・70 回大会でのフォーラム開催の準備を進めた。

2023 年度活動予定

- ・71 回大会でのランチョンセミナー（フォーラム）とポスター展示の準備を行う。
- ・フォーラム内容の動画配信の検討を引き続き行う
- ・オンライン大会で録画された動画を公開する方向での検討を行う。
- ・安全マニュアルの改訂を行う。
最新の情報と技術へのアップデートを行う。
朝倉書店から書籍化についての話があり、検討と準備を進める。
英訳について検討と準備を進める。
- ・事故情報の収集と集約
野外調査・実習中の事故やヒヤリハット事象の例を引き続き収集し、解析を続ける。
該当の事例があれば、野外安全管理委員会に連絡をいただきたい。また、事故の報告書が大学・研究所等で出版された場合は、ご教示ください。
- ・和文誌の『フィールド調査における安全管理マニュアル』の配布
在庫がかなりあるので、高校や研究機関、および会員への配布を引き続き行う。必要な場合は、連絡をお願いします。

(文責：石原道博)

12. キャリア支援専門委員会

出席者

上野、成田、木村、鈴木牧、河内、東樹、沼田、宮脇、鈴木智、西田、三宅、半場、荒木、森田、可知、高野（16 名）
(欠席) 高田、曾我、中臺、諸澤、幸福、黒瀬、塩尻、富田、

寺田、小山、小泉

【2022 年度活動報告】

1. 仙台大会での企画（全オンライン）

- ・キャリア支援フォーラム U08 3/20 13:00-14:30 Room D

「私たちの考える理想のキャリアパス：会員アンケート調査」

- ・男女共同参画フォーラム U05 3/20 15:00-16:30 Room E

「研究職を天職に！ 情熱とキャリアアップと、そして、ワーク・ライフ・バランス」

- ・キャリア支援相談室

- ・（一社）Sus-Pro の相談員による無料の就職・転職相談窓口（3/17,18,20 13:00-18:00、予約制、最大 30 名まで受付可）

- ・キャリア支援ランチセッション（学会員・学会OBOG による就職とキャリア形成に関する話題提供）（3/18 12-13 時「生態系と社会との接点 認証審査というシゴト」）

- ・企業等の就職関連情報（大会 HP へのリンク掲載）

- ・託児補助運営サポート

実行委員会の託児担当者との協力により、スムーズに事が運べた。

- ・CPD 認定プログラムの導入（シンポ 4 件、フォーラム 4 件）と受講証明書の発行

2. その他

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年 3 回）

男女共同参画学協会シンポジウムへの参加・報告書作成

- ・女子中高生夏の学校でのポスター掲示、オンライン座談会への参加、講師によるオンライン実習を実施した

- ・各種統計情報の和文誌化

生態学会和文誌 72(2) の学術情報特集に報告が掲載された

①会員データ、②男女共同参画学協会連絡会による大規模アンケート、③大会参加者の属性データ

- ・男女共同参画学協会連絡会幹事学会タスクフォースへの協力

【来年度の活動計画】

1. 横浜大会での活動

- ・キャリア支援フォーラム

- ・男女共同参画フォーラム

- ・キャリア支援相談室（個別面談、イベント）

- ・企業等の就職関連情報（大会 HP へのリンク掲載）

- ・託児支援サポート

- ・CPD 受講証明書の発行

2. その他の活動

- ・男女共同参画学協会連絡会運営委員会への参加（年 4 回程度）

- ・男女共同参画学協会シンポジウムへの参加（年 1 回）

- ・女子中高生夏の学校・学会・学術賞等への応募支援

- ・男女共同参画学協会連絡会幹事学会タスクフォースへの協力

- ・学会 HP においてジェンダーギャップに配慮した文案の提案

(文責：上野裕介)

13. 情報交流支援専門委員会

(1) Jeconet の運営状況について

- ・会員数：3317 人（3 月 3 日現在）
- ・配信数：1388 件（ 〃 ）
- ・研究情報の交流，シンポジウムなどのイベント案内，生態学が関係する職業に関する求人案内など，活発な情報交換に活用されている。
- ・管理運営上の特段の課題は生じていないが，会員からのメール配信確認，メールアドレス登録・変更等に関する問い合わせは多数あるので，委員はこれらに対処している。
- ・Jeconet 会員ならびに日本生態学会会員には，日本生態学会ホームページでの Jeconet 関連ページを確認するようにお願いしている。

(文責：村岡裕由)

14. 男女共同参画学協会連絡会 第 21 期幹事学会タスクフォース

- 男女共同参画学協会連絡会 幹事学会の業務
正式加盟 / オブザーバ学協会 45/65
業務：年 3 回の運営委員会の開催、メーリングリストでの情報発信、シンポジウムの企画運営、提言要望活動、女子中高生夏の学校の支援、大規模アンケートの実施・解析など
- 幹事学会としての今後の予定（幹事学会の任期は 2023 年 10 月 31 日まで）
第 2 回運営委員会 2023 年 3 月 27 日 14 時～16 時（Zoom）
第 3 回運営委員会 2023 年 8 月 27 日（Zoom）
連絡会シンポジウム 2023 年 10 月 14 日（土）午前 9 時～午後 6 時
- シンポジウムについて
「フィールドワーク分野のダイバーシティとインクルージョン ～フィールドワークの研究分野で誰もが能力を発揮し輝くために～」(仮)
・2023 年 10 月 14 日（土）午前 9 時～午後 6 時
・東京大学 弥生講堂 一条ホール・会議室・セイホクギャラリー
・開催形式：ハイブリッド
フィールドワークの研究分野での課題について、生態学会員にアンケートをとり、その結果をパネルディスカッションで活用する案が出ている。アンケートをとることになった場合、ぜひご協力をお願いしたい。
- 2023 年度 女子中高生夏の学校
日 時：8 月 5 日（土）～7 日（月）
場 所：国立女性教育会館

実験・実習：8 月 6 日（日）午前 ポスター：午後

- (1) 現地開催でオンライン配信なし
- (2) 生徒募集を 90 名程度、募集数は実験・実習は 10 ～ 14、ポスターセッションは 30 程度
- (3) 4 月に事前調査アンケート、5 月から正式な募集を開始（予定）。

(文責：半場祐子)

15. 監査報告

一般社団法人 日本生態学会

監事 永松大・瀧本岳

当法人の 2022 年度の事業計画、計算書類、これらの附属明細書、そのほか理事の職務執行の監査について、次の通り報告する。

1. 監査の方法及びその内容

2022 年度を通じ、各監事が必要な調査を行い、その結果を監事間で協議して監査を実施した。具体的には、すべての理事会に Web 会議システムで出席し、重要な報告書等を随時閲覧した。また、事前に資料を電子媒体で受領した上で、2023 年 2 月 9 日に学会事務局と Web 会議システムで接続し、関係する会計書類を逐次閲覧した。さらに、必要に応じて、これらの内容について関係する理事に説明を求めた。

2. 監査の結果

- (1) 事業報告書及びその附属明細書は法令および定款に従い当法人の状況を正しく表示している。
- (2) 理事の職務の遂行に関し、不正の行為もしくは定款に違反する重大な事実はない。
- (3) 計算書類とその附属明細書は当法人の財産および損益の状況をすべての重要な点において適正に表示している。

16. 英文誌出版状況報告

- 1) 生態学会会員が責任著者の ER の出版論文については、18 万円で OA 出版できるようにする方針が認められ、準備作業を進めている。地区会レベルでも独自支援の動きがあり、若手会員の無料 OA 出版が可能な体制を構築する方向に進んでいる。これは、特に転換契約の枠から外れる会員のサポートを想定している。本 OA 補助制度の目的と狙いについて、フォーラム U03「転換契約って何？ 日本の OpenScience の推進と学会誌の転換」で説明予定。
- 2) 2023 年度研究成果公開促進費（国際情報発信強化）について、国際情報発信強化（B）「ダイバーシティとオープンサイエンスの推進による国際情報発信強化」、オープンアクセス刊行支援「種生物学から拓く OA 誌出版を通じた種多様性生態学の国際情報発信の強化」を申請中。
- 3) 次世代育成型エディターについては 3 月末で 3 名が退任予定で、公募により 3 名を採用した。退任者は本業である研究職の条件が改善した、もしくはパーマナントポジションへの着任が理由で、将来、英文誌出版に貢献出来る人材育成という観点からは順調なキャリア形成につながっている。また、内 1 名は PSB 誌の編集委員として着任予定。一方、採用者に

については、国籍・ジェンダー・ポジションが多様で、いずれも高い研究・英語能力を保持していると判断される。このようなスタッフによって効率的に英文誌の出版運営が出来る体制を今後も維持したい。なお、継続的に勤務しているスタッフは、子育て中、もしくは僻地居住でリモート業務が適している研究継続希望者と、全体の運営マネージャ、広報担当者である。

- 4) 2月からER誌の新Webページを公開している(<https://esj.ne.jp/er/index.html>)。従来のWebページは、Springer社のERオフィシャルページの構成が学会誌向けでは無かったため、2014年に海外研究者向けに作成したもので、ER誌の統計情報や論文情報、受賞者情報などを掲載していた。しかし、出版社がWiley社になりオフィシャルページの構成が大幅に改善されたため、海外研究者向け情報よりも、むしろ国内会員向け情報のニーズが高まっていると判断された。そこで、生態学会Webページとデザインを合わせて内容を刷新し、ER誌の日本語情報に加えてER編集長や副編集長による各号の内容についての日本語コメントが毎号更新されるような構成に刷新した。ER誌Webページの構成が固まり次第、順次PSB誌、PE誌についても同様のWebページを作成していく予定。生態学会英文誌における広報活動については本大会のフォーラムU10「Ecological Researchで特集企画(Special Features)を出版しよう」でも説明する。
 - 5) 2月よりWiley社のunder review serviceであるAuthoreaを、3誌に導入した。
<https://www.authorea.com/inst/26386-ecological-society-japan>
このサービスは、Ecology & Evolution誌などで導入されており、今後は、著者が投稿時に、投稿原稿をプレプリントとして事前公開するかどうかを選択できるようにする。
 - 6) 3月2日にWiley社から3誌の契約書案が送られてきた(本来は昨年12月中に準備される予定だったもの)。2022年8月25日提案された出版契約案とは大きな変更はないが、Authoreaの導入が加わっている。現契約からの大きな変更点として、3誌の出版元が日本生態学会に一元化されること、Population EcologyおよびPlant Species BiologyのSociety feeの廃止、冊子体については全てPrint on demandによる、最低保証Royaltyの条件変更(定額制→前年実績の80%額を保証)、Editorial office supportの廃止、に加えて、2026年以降Wiley社の編集事務局サービスの無料提供が提案されている。
- 生態学会への英文誌(Population EcologyとPlant Species Biology)の所有移管については昨年度中に個体群生態学会、種生物学会との間で合意済みであり、各学会会長による、雑誌所有移動についての合意書(ワイリーへ提出)へのサインと、各学会間での出版覚書の改訂作業が必要であり、事務局の方で準備中である(契約書のWiley社への提出は4月中

を予定)。

実質的な大きな変更点としては、最低保証Royaltyの条件変更で、出版収支の現状が維持されれば現契約より若干、支払いが減少する。また、論文収入が増えれば出版収支が改善し学会収入が増加するものの、減少した場合には学会からの支払いが大幅に増える可能性がある。論文収入の増加はOA論文出版数と直結しており、世界的な出版動向の変化に対応した運営が求められる。3月の生態学会大会では、Wiley社のOA出版責任者であるAlice Woodさんを演者として招聘し、OA出版と転換契約についてフォーラムU03「転換契約って何? 日本のOpenScienceの推進と学会誌の転換」を開催し、生態学会としてのOA補助制度の導入と、今後の英文誌出版の方針について会員に周知・議論する予定。

- 7) 12月に開催された英国生態学会BES2022では辻理事、山内PE編集長、難波氏が生態学会の代表として参加した(内、辻理事は学会による旅費負担)。Wiley社の協力の下、英文誌3誌のブース出展を行い、生態学会のノベルティー配布やサンプル配布、大型液晶ビジョンを利用した宣伝資料の投影など。積極的な広報・学会間交流を行った。各国の生態学関連学会によるランチョンミーティングやブースでの活発な情報交換が行われたが、関係者からは保全生態学分野のCambridge大学William Sutherland教授との継続的な交流を助言された。特に「保全生態学の一次情報を論文化するときのフォーマット化」の提案がなされ、世界で比較可能な資料が他にどのようなものがあるのかを明記するNatureのポートフォリオ形式の情報付記の普及が必要との問題意識があった。辻理事からからは、この全体像と意義を説明してもらうことをSutherland教授来日の口実にする可能性が提案された。

2020年以降、ER誌への海外からの投稿数は激減しており、担当編集者、査読者も日本国内所属の割合が急増している。また、対面大会の未開催が継続しているため、ERシンポジウムも開催されず、大会を通じた海外研究者としての交流活動が停滞している。英文誌出版については、日本国内だけに留まっていた縮小再生産の過程に陥る可能性が高く、積極的な国際化推進が必要な状況。(文責：出版担当理事 久米 篤)

B. 審議事項

第1号議案 役員退任に伴う改選に関する件

以下の役員候補者の改選について満場異議なくこれを可決承認した。

- ・任期満了により退任する役員(任期:2021.3総会後～2023.3総会まで)

理事:大塚俊之、佐々木雄大、本庄三恵

監事:永松大

- ・理事会推薦役員候補者(任期 2023.3総会後～2025.3総会まで)

理事:立田晴記、赤坂宗光、辻かおる

監事:大塚俊之

第2号議案 2022年決算承認に関する件

当期（自2022年1月1日至同年12月31日）における決算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
費 目	22 予算	22 決算	費 目	22 予算	22 決算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	25,000,000	25,397,200	ER・PE・PSB	1,500,000	1,518,324
正会員（学生）	4,800,000	5,128,600	生態誌	1,500,000	1,807,495
賛助会員	1,400,000	1,442,000	保全誌	2,800,000	2,631,845
小 計	31,200,000	31,967,800	会誌発送費用	400,000	384,230
科研費（国際情報発信強化A）	12,600,000	12,600,000	ニュースレター	300,000	269,500
学会誌売上げ	500,000	666,500	英文校閲・翻訳	300,000	10,120
出版印税	500,000	686,730	英文誌 Open Access 経費	5,000,000	7,371,294
論文掲載料	1,400,000	1,551,300	和文誌編集費	550,000	482,675
広告代	0	30,000	小 計	12,350,000	14,475,483
著作権使用料	150,000	209,726	会議費	150,000	212,616
大会収入	20,000,000	19,613,000	旅費・交通費	1,000,000	488,405
講習会費	0	0	人件費	16,500,000	16,278,723
寄附金	0	0	地区会活動費	2,000,000	1,779,034
その他	2,000	3,027	大会支出	20,000,000	13,896,340
前年度繰越金	100,836,515	100,836,515	個体群生態学会出版企画費	350,000	358,069
			INTECOL 会費	2,250,000	0
			事務費		
			通信費	300,000	232,090
			消耗品費	400,000	375,532
			雑費	350,000	229,664
			決済代行手数料	2,000,000	724,232
			サーバ関連費	300,000	715,815
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小 計	5,030,000	3,957,333
			各種委員会費	1,500,000	388,041
			広報費	100,000	924,611
			選挙費	0	0
			EAFES 費用	0	0
			講習会費	200,000	0
			会員管理委託費	4,600,000	4,449,903
			法人税	300,000	209,300
			次年度繰越金	100,858,515	110,746,740
合 計	167,188,515	168,164,598	合 計	167,188,515	168,164,598
単年度収入	66,352,000	67,328,083	単年度支出	66,330,000	57,417,858
			単年度収入 - 支出	22,000	9,910,225

<特別会計>
賞準備金

収入の部			支出の部		
	22 予算	22 決算		22 予算	22 決算
前年度繰越金	10,424,150	10,424,150	賞金		
預金利息	0	86	宮地賞	200,000	200,000
			大島賞	200,000	200,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	600,000	600,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	9,824,150	9,824,236
合 計	10,424,150	10,424,236	合 計	10,424,150	10,424,236

貸 借 対 照 表

2022 年 12 月 31 日現在

一般社団法人 日本生態学会

(単位：円)

科 目	金 額	科 目	金 額
(資 産 の 部)	円	(負 債 の 部)	円
流 動 資 産		流 動 負 債	
現 金 及 び 預 金	144,120,608	未 払 金	4,498,981
前 払 費 用	1,317,430	未 払 法 人 税 等	209,300
未 収 収 益	240,600	前 受 金	25,491,310
		預 り 金	359,500
固 定 資 産		固 定 負 債	
特定資産 学会賞準備金資産	9,824,236	退 職 給 付 引 当 金	4,372,500
		負 債 合 計	34,931,898
		(正 味 財 産 の 部)	
		一 般 正 味 財 産	110,746,740
		指 定 正 味 財 産 (う ち	
		特定資産への充当額)	9,824,236
		正 味 財 産 合 計	120,570,976
資 産 合 計	155,502,874	負 債 ・ 純 資 産 合 計	155,502,874

第3号議案 2023年度予算承認に関する件

次期（自2023年1月1日至同年12月31日）における予算案について満場異議なくこれを承認可決した。

<一般会計>

収 入			支 出		
費 目	22 決算	23 予算	費 目	22 決算	23 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	25,397,200	25,000,000	ER・PE・PSB	1,518,324	1,500,000
正会員（学生）	5,128,600	5,000,000	生態誌	1,807,495	2,000,000
賛助会員	1,442,000	1,400,000	保全誌	2,631,845	2,800,000
小 計	31,967,800	31,400,000	会誌発送費用	384,230	400,000
科研費（国際情報発信強化 A）	12,600,000	0	ニュースレター	269,500	300,000
学会誌売上げ	666,500	500,000	英文校閲・翻訳	10,120	—
出版印税	686,730	700,000	英文誌 Open Access 経費	7,371,294	9,000,000
論文掲載料	1,551,300	1,500,000	英文誌編集費	—	600,000
広告代	30,000	20,000	和文誌編集費	482,675	600,000
著作権使用料	209,726	200,000	小 計	14,475,483	17,200,000
大会収入	19,613,000	10,000,000	会議費	212,616	300,000
講習会費	0	0	旅費・交通費	488,405	1,000,000
寄附金	0	0	人件費	16,278,723	16,500,000
その他	3,027	2,000	地区会活動費	1,779,034	1,831,544
前年度繰越金	100,836,515	110,746,740	大会支出	13,896,340	13,000,000
			個体群生態学会出版企画費	358,069	350,000
			INTECOL 会費	0	300,000
			事務費		
			通信費	232,090	300,000
			消耗品費	375,532	400,000
			雑費	229,664	300,000
			決済代行手数料	724,232	1,000,000
			サーバ関連費	715,815	400,000
			事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			小 計	3,957,333	4,080,000
			各種委員会費	388,041	1,000,000
			広報費	924,611	1,000,000
			選挙費	0	250,000
			EAFES 費用	0	200,000
			講習会費	0	300,000
			会員管理委託費	4,449,903	4,600,000
			法人税	209,300	300,000
			次年度繰越金	110,746,740	92,857,196
合 計	168,164,598	155,068,740	合 計	168,164,598	155,068,740
単年度収入	67,328,083	44,322,000	単年度支出	57,417,858	62,211,544
			単年度収入 - 支出	9,910,225	-17,889,544

＜特別会計＞
学会賞準備金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	22 決算	23 予算		22 決算	23 予算
前年度繰越金	10,424,150	9,824,236	賞金		
預金利息	86	0	宮地賞	200,000	200,000
			大島賞	200,000	100,000
			鈴木賞	200,000	200,000
			小計	600,000	500,000
			雑費	0	0
			次年度繰越金	9,824,236	9,324,236
合 計	10,424,236	9,824,236	合 計	10,424,236	9,824,236

第 4 号議案 第 73 回大会（2026 年）担当地区会に関する件

第 73 回大会（2026 年）担当地区会候補近畿地区の提案があり満場異議なく承認可決した。

第 5 号議案 新賞設置に関する件

新賞「日本生態学会自然史研究振興賞」設置について以下の提案があり、承認を求めたところ満場異議なく承認可決した。

日本生態学会自然史研究振興賞

1. 提案内容

生物多様性に関する記載研究を推進している会員を表彰する新たな賞の提案
久保田康裕（琉球大学理学部・株式会社シンクネイチャー）

●賞の趣旨

日本生態学会自然史研究振興賞（仮称）は、生物多様性の理解の源となる記載研究を地道におこなうことなどにより、生態学の基盤強化に寄与している本法人の会員を対象として、選考を経て選ばれた者に授ける。ここでの記載研究とは、生物多様性の可視化の源泉となる情報、すなわち生物の分類や分布、生活史などに焦点を当てた地道な研究であり、特定の地域に根差した調査も含む。原則として研究成果が公開され、一次情報が生態学研究やその関連コミュニティにおいて広く共有されているものを選考対象とする。

●新たな賞の原資と賞金について

具体的には、10 年間の授賞を想定した賞金（200 万円程度）を、シンクネイチャーから生態学会へ寄付する。生態学会においては、この寄付金を原資にして、生態学の基盤になる記載研究をやっている方を、毎年 2 名（団体）程度（1 名 10 万円程度の年 20 万円の賞金を含めて）授賞することを検討していただきたい。

2. 日本生態学会自然史研究振興賞（仮称）の応募イメージ

1) 市町村などの博物館、植物園、樹木園に所属する職員やそのボランティアグループが長期間にわたって

記載研究を続け、館報などで公表してきた動植物リスト、フェノロジーデータ、分布地などのインベントリーデータ。収集データが生態学的に価値が高く、引用・利用できる形で公開されているもの。調査・研究活動のとりまとめを中心的に行っている職員が生態学会員である場合。

Ex) A 市の野草園の館長で、蛇紋岩植物の群集組成や分布地、新種記載の多くの研究を館報に掲載し、蛇紋岩植物の全体像を大きく進展させた例。

2) アマチュア研究者や任意の研究グループ（市民の植物同好会や昆虫研究会など）による研究で、地域の生物相や分布状況、フェノロジー情報、形態・形質情報、生活史情報などを蓄積し、会報などで公表されてきた研究。収集データが生態学的に価値が高く、引用・利用できる形で公開されているもの。調査活動のとりまとめを中心的に行っている人物が生態学会員である場合。

Ex) 地方の昆虫研究会に所属し、移動性のチョウにマーキングを行い、全国各地から再捕獲の情報を集め、移動パターンを解明した研究。

3) 中学・高校の生物部などで、長期間行っている地域の生物相、フェノロジー、行動観察に関する研究で、生態学的に価値が高く、引用・利用できる形で公開されているもの。顧問の先生などが生態学会員である場合。

Ex) S 市の高校生物部の研究として、地域の湿地に生息する水生昆虫のインベントリー調査を長年にわたって続け、土地利用や気候変化による生物相の変動を詳細に記載した研究。O 県の私立高校の教員をしながら県内のすべての有人島のアリ種の分布調査を行ない、退職後に全標本を大学に寄贈した T 氏。

4) 大学附属の博物館などで、地域の生物相や生物分布（外来種含む）を丹念に記載し、紀要などで論文として公開すると同時に、収集した生データを要望に応じて公開・提供している場合。

Ex) R 大の附属博物館の S 先生：地域の生物分布やその変化を長年にわたって観察記録し、希少種や外来種などの情報（生データ）を地域の自然環境行政施

策立案に還元し、同時に、県外から訪れる研究者に対しては野外調査を支援するための基礎的な情報を提供している。

II. 第70回日本生態学会大会の記録

第70回日本生態学会大会はオンラインにて2023年3月17日～3月21日に開催されました。

大会期間中に公開講演会、シンポジウム10、自由集会20、フォーラム10、一般講演（口頭発表）233、一般講演（ポスター発表）654、高校生ポスター65、ジュニア生態学講座、が行われました。参加者は2490名でした。5日間の日程とポスター賞・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日 程

3月17日 開会挨拶、一般講演（口頭発表・ポスター発表コアタイム）

3月18日 公開講演会、一般講演（口頭発表・ポスター発表コアタイム）、懇親会

3月19日 シンポジウム、自由集会、フォーラム、高校生ポスターコアタイム、みんなのジュニア生態学講座

3月20日 シンポジウム、自由集会、フォーラム

3月21日 総会、授賞式、受賞記念講演

ポスター賞受賞者

<植物生理生態 / Plant ecophysiology >

【最優秀賞】

「カブモザイクウイルスが植物—アブラムシ相互作用に与える影響と介在遺伝子の探索」*大坪 雅, 工藤 洋, 本庄 三恵 (京都大学)

【優秀賞】

「山岳域における細根の水獲得・保持機能の環境応答性：針葉樹と広葉樹の樹種間比較」*増本 泰河, 橋本 裕生, 伊藤 拓生, 牧田 直樹 (信州大学)

「花蜜酵母の種類がマルハナバチの嗜好性を変えるのか」*廣野 由奈, 河野 亮介 (東邦大学)

<動物繁殖・生活史 / Animal reproduction and Life history of animals >

【最優秀賞】

「日本産被食散布型植物の各階層における果実の色の多様性」*松浦 真央 (大阪公立大学), 名波 哲 (大阪公立大学), 山岡 里帆 (大阪公立大学), 上羽 亮太郎 (大阪市立大学), 伊東 明 (大阪公立大学)

【優秀賞】

「岩手県の落葉樹林における種子生産量の長期パターン：個体群レベル・個体ベースの推定」*本間 千夏 (秋田県大・生物資源), 野口 麻穂子 (森林総研東北), 正木 隆 (森林総研), 星野 大介 (森林総研), 星崎 和彦 (秋田県大・生物資源)

「オニタビラコ2亜種の都市-里山間における種子散布能力と空間的分布の比較」*中野 崇平, 丑丸 敦史 (神戸大学)

<植物個体群・群落 / Plant population and Plant community >

【最優秀賞】

「繁殖様式の異なる日本のヤマノイモ属植物の地理的遺伝構造の比較」*岡本 一希 (大阪市立大学), 名波 哲 (大阪公立大学), 徳本 勇人 (大阪公立大学), 吉原 静恵 (大阪公立大学), 伊東 明 (大阪公立大学)

【優秀賞】

「積雪下で発芽することの適応的意義 - 展葉日と成長率に注目して -」*Kanta EBINA, Kiyoshi ISHIDA (Hirotsuki Univ.)

「日本の島嶼域に隔離分布するオキナワハイネズ近縁種群の分子系統地理学的解析」*田口 裕哉 (東北大・農), 高橋 大樹 (東北大・農), 伊東 拓朗 (東北大・植物園), 田金 秀一郎 (鹿児島大・博物館), 菅原 峻太 (東京学芸大・教育, 都立大・牧野), 小栗 恵美子 (東京学芸大・教育), 阿部 晴恵 (新大・佐渡セ), 陶山 佳久 (東北大・農)

<行動 / Behavior >

【最優秀賞】

「イソヘラムシは動かない：対捕食者行動としての不動行動と複数種の捕食者への反応」*五十嵐 公一, 和田 哲 (北海道大学)

【優秀賞】

「アデリーペンギンの採餌トリップにみられる集団的行動」*今木 俊貴 (総合研究大学院大学), 國分 互彦 (総合研究大学院大学, 国立極地研究所), 塩見 こずえ (東北大), 高橋 晃周 (総合研究大学院大学, 国立極地研究所)

「アザラシ科 Pusa 属 Phoca 属における頬歯の形態と食性との関係」*石原 有乃 (総合研究大学院大学), 渡辺 佑基 (総合研究大学院大学, 国立極地研究所)

「ニホンカワネズミの食性における季節変化：糞を用いたDNAメタバーコーディング」*塩塚 菜生 (奈良女子大学), 片野 泉 (奈良女子大学), 土居 秀幸 (京都大学), 齊藤 達也 (京都大学), 一柳 英隆 (熊本大学)

「カワスズメ科魚類 *Neolamprologus pulcher* における顔の地域変異と異人種効果」*西田 光希, 川坂 健人, 十川 俊平, 幸田 正典, 安房田 智司 (大阪公立大学)

<動物繁殖・生活史 / Animal reproduction and Life history of animals >

【最優秀賞】

「近代的水田におけるツチガエルの早期変態とその個体群動態への影響」*木村 楓, 曾田 貞滋 (京都大学)

【優秀賞】

「コクヌストモドキとオオツノコクヌストモドキの二種間の繁殖における相互作用の検証」*大西 流偉 (香川大学), 松村 健太郎 (岡山大学), 安井 行雄 (香川大学)

<動物個体群 / Animal population >

【最優秀賞】

「シカのヌタ場が両生類の繁殖に与える影響」*松浦 なる (北大・農), 岡宮 久規 (ふじのくに環境史博), 八柳 哲 (北大・農), 坂田 雅之 (北大・農), 岸田 治 (北大・FSC), 荒木 仁志 (北大・農)

【優秀賞】

「河川利用はスズキに高成長をもたらすか？耳石解析に基づく回遊履歴・成長履歴の推定」* 高井 万葉（東京大学）、黒木 真理（東京大学）、白井 厚太郎（東京大学）、眞名野 将大（水産研究・教育機構）、富樫 博幸（水産研究・教育機構）、櫻井 慎大（水産研究・教育機構）、児嶋 大地（京都大学）、村上 弘章（東北大学）、久米 学（京都大学）、市川 光太郎（京都大学）、三田村 啓理（京都大学）、山下 洋（京都大学）

「サケの産卵は鳥類捕食者の分布を規定するか？」* 山田 太平（北海道大学）、片平 浩孝（麻布大学）、三浦 一輝（北海道立総合研究機構）、中村 太士（北海道大学）

<動物群集 / Animal community>

【最優秀賞】

「共生細菌叢はどこまで宿主遺伝子型特異的か：ミジンコ細菌叢移植実験からの考察」* 市毛 峻太郎、張 璇、占部 城太郎（東北大学）

【優秀賞】

「土壌生態系における微生物群集の相互作用ネットワーク動態」* 景山 拓矢、東樹 宏和（京都大学）

<動物と植物の相互関係 / Animal-plant interaction>

【最優秀賞】

「人工果実を用いた野外実験による鳥類の果実の色の嗜好性の評価」* 山岡 里帆（大阪公立大学）、名波 哲（大阪公立大学）、松浦 真央（大阪公立大学）、上羽 亮太郎（大阪市立大学）、伊東 明（大阪公立大学）

【優秀賞】

「花形態の複雑化が開花密度・繁殖成功関係へもたらす影響」* 佐藤 秋周（神戸大学）、丑丸 敦史（神戸大学）、川上 風馬（神戸大学）、中土井 洋平太（神戸大学）、朝田 愛理（神戸大学）、石井 博（富山大学）、白鳥 裕太郎（富山大学）

「カリガネソウの曲がる花茎は雄の繁殖成功を高める」* Masaki MASUDA, Atsushi USHIMARU, Airi ASADA (Kobe Univ.)

<物質循環 / Material cycling>

【最優秀賞】

「吹通川マングローブ、海草、サンゴ礁生態系間の炭素・栄養塩循環」* 中村 航（東京大学）、PHYOTHE NAING (Ministry of Natural Forest)、渡辺 謙太（港湾空港技術研究所）、中島 壽視（福井県立大学）、源平 慶（港湾空港技術研究所）、杉本 亮（福井県立大学）、宮島 利宏（東京大学）、桑江 朝比呂（港湾空港技術研究所）、佐々木 淳（東京大学）

【優秀賞】

「リン可給性の異なる土壌に生育するコナラの葉のリン画分」* 長谷川 笑美（京大・森林生態）、水上 知佳（京大・森林生態）、向井 真那（山梨大・生命環境）、辻井 悠希（九大・生物）、青柳 亮太（京大・森林生態）、北山 兼弘（京大・森林生態）

「2015/16年のスーパーエルニーニョはボルネオ熱帯雨林の水循環をどう変化させたのか？」* 羽田 泰彬（東京大学）、久米 朋宣（九州大学）、松本 一穂（琉球大学）、齋藤 隆実（森林総合研究所）、熊谷 朝臣（東京大学）

<景観・遷移・更新 / Landscape ecology, Succession and regeneration>

【最優秀賞】

「立山連峰のモンキチョウ類は、どこからきたのか？」* 清水 大輔、山崎 裕治（富山大学）

【優秀賞】

「哺乳類の林道利用に影響を与える環境要因」* 鈴木 美緒、斎藤 昌幸（山形大学大学院）

「都市近郊林の草本植物群集がもつ機能的多様性の評価」* 東 優樹（筑波大学）

<生物多様性 / Biodiversity>

【最優秀賞】

「日本のミミズの種多様性に緯度勾配を生じさせる要因は何か？」* 念代 周子（弘前大学）、佐藤 千佳（京都大学）、曾田 貞滋（京都大学）、奥崎 穰（東京大学）、長太 伸章（国立科学博物館）、南谷 幸雄（栃木県立博物館）、宮野 純（弘前大学）、池田 紘士（弘前大学）

【優秀賞】

「落葉リター分解における温暖化と植物種多様性の効果」* 林 夏帆（横浜国立大学）、高木 健太郎（北海道大学）、梁 乃申（国立環境研究所）、上田 実希（日本女子大学）、岡田 慶一（東京農業大学）、森 章（東京大学）

<生態系管理・生態学教育・普及 / Ecosystem management, Education and popularization of ecology>

【最優秀賞】

「東京都都市部における社寺林の鳥類多様性維持の役割の解明」* 松本 航汰、中島 一豪、伊藤 睦実、高田 まゆら（中央大学）

【優秀賞】

「衛星画像を用いた機械学習モデルの広域外挿による熱帯生産林の生態系サービス評価」* 小松 孝太郎（京大・森林生態）、竹重 龍一（京大・森林生態）、藤木 庄五郎（株式会社バイオーム）、今井 伸夫（東京農大・森林）、宮本 和樹（森林総合研究所）、相場 慎一郎（北海道大学）、北山 兼弘（京大・森林生態）、青柳 亮太（京大・森林生態）

<進化・数理 / Evolution and Mathematical ecology>

【最優秀賞】

「カニの移動方向はどのように進化したのか？：現生種情報を用いた祖先形質の復元」* 谷口 隼也（長崎大学、国立高雄科技大学）、井上 翼（長崎大学）、黄 榮富（国立高雄科技大学）、平井 厚志（エビとカニの水族館）、水元 惟暁（沖縄科学技術大学院）、竹下 文雄（北九州市立博物館）、河端 雄毅（長崎大学）

【優秀賞】

「性的対立による有性生殖の維持：ネギアザミウマを用いた検証」* 工藤 達実、長谷川 英祐（北海道大学）

「近縁なシロチョウ2種間の生態的分化：野外における食草利用とゲノム比較から探る」* 須田 峻、岡村 悠、土松 隆志（東京大学）

<保全 / Conservation>

【最優秀賞】

「血液を用いてヒグマの年齢を推定する ～DNAメチル化率を指標として～」* 中村 汐里（北大・獣医・野

生動物), 山崎 淳平 (北大・獣医・動物病院), 松本 直也 (のほりべつクマ牧場), 伊藤 英之 (京都市動物園, 京都大・野生研), 村山 美穂 (京都大・野生研), 斉 恵元 (京都大・野生研), 木下 こづえ (京都大・野生研), 山中 正実 (知床財団), 柳川 洋二郎 (北大・獣医・繁殖), 佐鹿 万里子 (北大・獣医・野生動物), 坪田 敏男 (北大・獣医・野生動物), 下鶴 倫人 (北大・獣医・野生動物)

【優秀賞】

「自然体験の "質" が生物多様性保全行動に及ぼす影響～生き物とのふれあいに注目して～」* 青田 雄太郎 (東京大学)

「住民と訪問者の運転速度に関わる心理的経路の違い：西表島でのロードキル低減に向けて」* 井村 彩恵子 (東京農工大学), 赤坂 宗光 (東京農工大学), 鈴木 愛 (立命館大学, 東京都立大学, 京都大学)

<外来種 / Introduced species >

【最優秀賞】

「毒源ヒキガエル侵入による在来ヤマカガシの頸腺毒獲得と対捕食者行動の変化」* 澤田 聖人 (筑波大学), 井上 貴斗 (京都大学), 森 直樹 (京都大学), 森 哲 (京都大学), 上條 隆志 (筑波大学)

【優秀賞】

「外来種マダラコウラナメクジの定着が生態系へ与える影響：生息環境と食性に着目して」* 小松 航 (筑波大学), 池澤 広美 (茨城県自然博物館), 佐伯 いく代 (筑波大学)

「外来植物駆除で植生は回復するのか？小笠原諸島兄島の事例」* 瀬戸 智大 (横浜国立大学大学院, 日本森林技術協会), 小池 文人 (横浜国立大学大学院)

高校生ポスター賞受賞者

【最優秀賞】

「走行性を示さない照度におけるボルボックスの成長」牛草 晶 (埼玉県立春日部高校)

「アカハライモリの音の選好」部家 匠 (金沢大学附属高等学校), 西川 潮 (金沢大学)

「ヨシが持つ2つの藍藻増殖抑制効果：Microcystis aeruginosa を用いた検証」飯田 慧土 (清風高等学校), 風間 健宏 (神戸大学), 奥田 昇 (神戸大学)

【優秀賞】

「二次林におけるモミの更新条件と里山保全活動の影響」鈴木 悠人, 弓削 吏久, 小坪 慎太郎, 笠村 颯吾, 山崎 優貴 (海城中学高等学校)

「紙魚の食性～紙魚は紙の何を食べる？～」伊添 万志郎, 村井 瞭介, 見尾 竜海 (高槻高等学校)

「魚類の性転換における生体内外の変化と採血を用いた性識別の確立」相木 春人, 石黒 翠碧, 小山 悠太 (浅野中学高等学校)

「オオサンショウウオの生息条件 なぜ揖斐川にオオサンショウウオがいないのか？」杉本 巧翔, 伊藤 力也, 金森 愛子, 成瀬 心遥, 木村 仁美, 飯田 智輝, 永田 壱吹, 森 憲仁 (大垣北高校自然科学部)

「銅像山における炭素収支の経年変化と炭素固定機能の改善」藤吉 康光, 山川 寛太, 岳本 航希, 近藤 絢人, 工藤

良史, 高橋 佑弥, 小山 悠太 (浅野中学・高等学校)

【審査員特別賞】

「なぜ、ギンボシザトウムシはクモの巣に引っかかるのか？」野元 颯真, 瀬戸山 凌汰, 大川 畑 星成, 塩入 晴陽, 内村 燎人, 味園 桃花, 浅井 雄貴 (錦江湾高等学校)

「アレチヌスビトハギの繁殖戦略」進藤 慶太 (岡山大安寺中等教育)

「オオゴマダラは色覚を用いて赤系統のカランコエに訪花する」村井 遥奈, 佐々木 結夢, 柴野 恭輔, 橋本 健汰 (石川県立七尾高等学校)

「鳥の羽の撥水性と特徴」北沢 優花 (青稜高等学校)

「GPS を使ったカラスバトの生態解明への挑戦」勝見 美海, 大野 彩乃, 石井 綾乃 (都立国分寺高等学校)

「ヒキガエルの色彩パターンを用いた生態調査」城 陽太, 錦織 智崇, 細井 托人, 横山 翔, 高久 曜充, 中嶋 晟, 五辻 元 (東京都立科学技術高校)

「宮城県黒川沼の土壌シードバンクから得られた植物」浅野 日向子, 松田 唯, 菅原 栞, 白岳 航佑 (宮城県古川黎明中・高)

英語口頭発表賞 (Best English Presentation Award) 受賞者

< Ecosystem Management >

【Best English Presentation Award】

“Effects of alley-cropping and monoculture farming systems in oil palm plantations on butterflies diversity” Mohamad ashraf Bin ABDUL MUTALIB (Hiroshima University), Tetsuro HOSAKA (Hiroshima University), Badrul Azhar MD SHARIFF (Universiti Putra Malaysia)

< Behavior >

【Best English Presentation Award】

“Nest complexity reflects individual worker behavior of termites” 菊池 顕生 (OIST), 水元 惟暁 (OIST)

【Excellent English Presentation Award】

“Antipathogenic defense by feces containing antibiotic-producing bacteria in a dampwood termite” 中嶋 聖朗 (京都大学), 松浦 健二 (京都大学)

< Plant Ecophysiology >

【Best English Presentation Award】

“Variation in functional traits of dominant tree species along an altitudinal gradient in a seasonally dry tropical forest in northern Thailand” NUTIPRAPUN Prapawadee (Osaka City University), KACHINA Panida (Chiang Mai University), HERMHUK Sutheera (Maejo University), THONGSAWI Jakkaphong (Kasetsart University), THINKAMPHEANG Sathid (Kasetsart University), NANAMI Satoshi (Osaka Metropolitan University), ITOH Akira (Osaka Metropolitan University), MAROD Dokrak (Kasetsart University)

< Conservation >

【Best English Presentation Award】

“Investigating the relationship between species distribution and microclimate in a rock-dwelling lagomorph, the northern pika” 崎山 智樹 (北海道大学), GARCÍA MOLINOS Jorge (北海道大学)

< Plant Population / Plant Community >

【Best English Presentation Award】

How life history drives genetic diversity of fragmented perennial plant populations

都築 洋一 (北大・院・環境科学), 佐藤 光彦 (かずさ DNA 研究所), 高田 壯則 (北大・院・環境科学), 大原 雅 (北大・院・環境科学)

< Material Cycling >

【Best English Presentation Award】

“Fine-root phosphatase activities in *Quercus serrata* and its determinants on a wide gradient of soil-phosphorus availability” 水上 知佳 (京都大学・森林生態学), 向井 真那 (山梨大学), 和穎 朗太 (農研機構), 江澤 辰広 (北海道大学), 北山 兼弘 (京都大学・森林生態学)

< Animal Ecology / Plant-Animal Interaction >

【Best English Presentation Award】

“Phylogeography of Siberian stone loach revealed by environmental DNA” Tetsu YATSUYANAGI (Hokkaido Univ.), Takashi KANBE (Hokkaido Univ.), Kazuya FUJII (Hokkaido Univ., Fukuda Hydrologic Center), Shouko INOUE (Hokkaido Univ.), Hitoshi ARAKI (Hokkaido Univ.)

< Evolution >

【Best English Presentation Award】

“Paternal genome elimination promotes altruism in viscous populations” Thomas HITCHCOCK (iTHEMS, RIKEN)

【Excellent English Presentation Award】

“Disparate patterns of niche evolution in the diversification of the Neotropical cycad genus *Ceratozamia* (Zamiaceae)” Jose Said GUTIERREZ-ORTEGA (RIKEN iTHEMS), Miguel Angel PEREZ-FARRERA (UNICACH, Mexico), Ayumi MATSUO (Tohoku Univ.), Mitsuhiko P. SATO (Kazusa DNA Res. Inst.), Yoshihisa SUYAMA (Tohoku Univ.), Michael CALONJE (Montgomery Bot. Cent., USA), Andrew P. VOVIDES (INCOL, AC, Mexico), Tadashi KAJITA (Univ. of the Ryukyus), Yasuyuki WATANO (Chiba Univ.)

Ⅲ. 業務執行理事の選任について

2023 年 3 月 21 日に 2023 年度第 1 回理事会が行われ業務執行理事が選任された。

業務執行理事 (任期: 2023 年 3 月 ~ 2025 年 3 月)

立田 晴記 (専務理事)

赤坂 宗光 (庶務担当理事)

辻 かおる (会計担当理事)

Ⅳ. 代議員の欠員補充について

近畿地区選出代議員潮雅之氏の所属地区変更があったため、近畿地区次点の井鷲裕司氏を代議員とすることが 2022 年第 4 回理事会にて承認された。

V. 書評依頼図書 (2022 年 10 月 ~ 2023 年 4 月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当

図書を差し上げます。ハガキ又は E メールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は 1 年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 山下洋・益田玲爾・甲斐嘉晃・鈴木啓太・高橋宏司・邊見由美編著「里海フィールド科学 京都の海に学ぶ人と自然の絆」(2022) 416pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-8140-0445-4
2. 源利文著「環境 DNA 入門 ただよう遺伝子は何を語るか」(2022) 120pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029715-8
3. 吉川賢著「森林に何が起きているのか 気候変動が招く崩壊の連鎖」(2022) 248pp. 中公新書 ISBN:978-4-12-102732-0
4. 柳川久監修 塚田英晴・園田陽一編「野生動物のロードキル」(2023) 340pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060246-4
5. Bryan F. J. Manly, Jorge A. Navarro Alberto 編 深谷肇一訳「生態学のための標本抽出法」(2023) 256pp. 共立出版 ISBN:978-4-320-05839-2
6. 菊水健史・永澤美保著「ヒト、イヌと語る コーディーターと K の物語」(2023) 192pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-063956-9
7. 国立研究開発法人水産研究・教育機構編「東日本大震災後の放射性物質と魚」(2023) 184pp. 成山堂書店 ISBN:978-4-425-88711-8

書 評

二井一禎著、左子芳彦コーディネーター (2023) 「われら古細菌の末裔: 微生物から見た生物の進化 (共立スマートセレクション 38)」 264pp. ISBN978-4320009387 共立出版 定価 2,000 円 + 税

本書は、細菌、古細菌、真核微生物に着目した地球上の生物進化を扱っています。従来、一般市民に限らず研究者でさえも、生物進化と言えば多細胞生物の爆発的な進化と多様化以降に起こる事象ばかりに注目してきました。しかし、地球上の生命が約 40 億年の歴史を持つとすると実にその 9 割以上の歴史は上記の微生物で占められるほど、微生物の進化は地球上の生命を理解する上で特に重要です。にもかかわらず、少なくともわが国では、上記の微生物の進化を概説する書はこれまでにあまりありませんでした。本書は、真核微生物学、とりわけ線虫研究の泰斗である著者が、長年にわたる大学での講義内容をベースに微生物の分類、進化、共生、生態についての最新知見を盛り込み、さらには研究者が成果を世に問う際の苦労についてのエピソードを紹介するなど、研究者だけでなく一般読者に対しても分かり易い表現で書き下ろしたものです。私は本書を読み終えて、著者の微生物学や生物進化におけるきわめて深い造詣に圧倒されただけでなく、生命の起源と原核生物から真核生物への進化に関する研究の進展の凄まじさに大変驚きました。

本書は、米国の微生物学者であるカール・ウーズ (Carl R. Woese) の研究業績と経歴を大きく取り上げており、

まさに「ウーズに始まり、ウーズに終わる」との表現が合うでしょう。微生物学や進化学を学んだ方は、ウーズの3ドメイン説の図を一度は見たことがあるのではないのでしょうか。この図に至るまで、そして至った後も、ウーズと彼の共同研究者たちは、世界中の、特にアメリカ国内の研究者からの冷たい反応や辛辣な批評を受け続けました。しかし、ウーズと彼の共同研究者は、自分たちのデータは科学的に正しいやり方で得られたこと、および結論に至るまで膨大な量の実験を蓄積してきたことを信じ、決して精神的に屈服しませんでした。本書では、研究の初期段階でウーズが共同研究者に「こいつらは細菌じゃないよ」と言い放ったエピソードが紹介されています（本書10ページ）が、まさにこれこそが人類による「古細菌」認識についての世界的な第一歩であったのです。本書には、ウーズのエピソードに限らず、他の研究者の苦労話も随所に紹介されており、真実を世に問う研究者魂を感じさせてくれます。

地球の有機物は、最初に地球上で合成されたのか？あるいは隕石落下によってもたらされたのか？それらの有機物からタンパク質や核酸がどのように生成したのか？さらには核酸の複製はどのように起こり進化したのか？本書ではこれらについても、後期重爆撃期などの宇宙規模での大イベントもまじえて、大変分かり易く説明しています。そして、原始地球の環境に類似しているとされる深海における生物進化、さらには大気環境の変遷、光合成をおこなう細菌へと続きます。私は、熱水噴出孔に生きる細菌のバクテリオクロフィルが、元々は熱感知のためのセンサーとして誕生したものが、後に光合成にも利用されるようになったことを知り、極限環境における微生物のしたたかさに驚きました。

本書の後半では、真核生物への進化が「細胞の共生」をもとに解説されています。現在では、「大型の（古）細菌が小型の（古）細菌を取り込んだ」という基本概念（本書154ページ）は多くの研究者に共有されています。また、核に関係が深いのは古細菌、細胞質に関係が深いのは真正細菌、核の進化にはウィルスも関係しているかもしれないとのことです。著者は、微生物の進化研究の過程において日本人を含む世界中の研究者がクレンアーキオータ、アイグアーキオータなどの古細菌のグループを次々と発見し、そしてついにアスガルド古細菌上門から真核生物が生まれたとの結論に達したいきさつを述べています。そしてここでも、「学問の世界では時の常識をいささか揺るがす新しい考えが提示されると、大概の場合学会の重鎮と呼ばれるような人からの批判にさらされることが多い（本書209ページ）」となります。しかし、古細菌の研究の進展は多少の批判を受けてもとどまることを知らず、そしてついに日本人研究者によって「E3モデル」という、従来の「細胞の共生」ではなく「からみつき」、「包み込み」、「細胞内共生化」による真核生物誕生モデルが提唱されるにいたります。この記述は、まさに本書の圧巻と言えます。そして最後に、ウーズへの称賛と畏敬の念で本書は締めくくられます。

よくある科学啓発本では、最終章では「〇〇と一般社会」のような章立てが多いのですが、本書では最初から

最後まで研究の進展とそれにまつわる研究者の努力などのエピソードがふんだんに盛り込まれ、一般の読者のみならず研究者にとっても大変読み応えのあるものです。さらに強調すべきは、本書では微生物の進化に関する日本人研究者の国際的な活躍が随所で紹介され、この分野における日本の貢献の高さが良くわかります。現在、微生物を扱う研究は、どの分野も極めて速いペースで発展しています。私は、微生物の進化に関わる体系だった知識と最先端の情報を得るための優れた良書として、本書を強くおすすめします。

（京都大学生態学研究センター 中野伸一）

一般社団法人日本生態学会 役員・代議員・委員一覧

代表理事（会長） 宮下 直 2022.3 ～ 2024.3
業務執行理事
（副会長・次期会長候補）

北島 薫 2022.3 ～ 2024.3
（専務理事） 立田 晴記 2023.3 ～ 2025.3
（庶務担当） 赤坂 宗光 2023.3 ～ 2025.3
（会計担当） 辻 かおる 2023.3 ～ 2025.3
（出版担当） 久米 篤 2022.3 ～ 2024.3
（男女共同参画） 木村 恵 2022.3 ～ 2024.3
（情報 /INTECOL） 村岡 裕由 2022.3 ～ 2024.3

理事（2022.3 ～ 2024.3）

吉田 丈人 近藤 倫生
辻 和希 鏡味麻衣子
佐竹 暁子 日浦 勉
酒井 章子 工藤 岳
小泉 逸郎 鈴木 牧
中野 伸一 和田 直也

監事

瀧本 岳 2022.3 ～ 2024.3
大塚 俊之 2023.3 ～ 2025.3

代議員（2021.12 ～ 2023.12）

全国代議員 相場慎一郎 石川 麻乃
小野寺雄介 鏡味麻衣子
北島 薫 工藤 岳
黒川 紘子 小泉 逸郎
近藤 倫生 酒井 章子
佐竹 暁子 辻 和希
日浦 勉 森 章
吉田 丈人
地区代議員 小林 真（北海道） 彦坂 幸毅（東北）
鈴木 牧（関東） 北村 俊平（中部）
井鷲 裕司（近畿）
市栄 智明（中国・四国）
細川 貴弘（九州）

Ecological Research 編集委員会

Editor-in-Chief 鈴木準一郎
Deputy Editor-in-Chief 富松 裕
Associate Editors
in-Chief Ming Dong 江成 広斗
深澤 圭太 兵藤不二夫
稲垣 善之 川津 一隆
小林 真 Bo Li
Zhijun Ma 牧野 渡
中路 達郎 及川 真平
長田 典之 大澤 剛士
阪口 翔太 瀧本 岳
横川 太一

Handling Editors

馬場 友希 Min Cao
Jae Chun Choe Franck Courchamp
Stuart J. Davies
Guillaume Echevarria
Jingyun Fang Yunting Fang
Jan Frouz 藤井 佐織
藤木 大介 福井 大
福島慶太郎
Raghavendra Gadagkar
Rebecca Gladstone-Gallagher
半場 祐子
平田 竜一 日浦 勉
Brenden Holland Sun-Kee Hong
市栄 智明 井田 崇
飯田 碧 今井 伸夫
David W. Inouye 石川 尚人
上條 隆志 加藤 知道
Eun-Shik Kim 北村 俊平
小林 和也 工藤 洋
松井 一彰 松尾奈緒子
松崎慎一郎 村上 正志
中村 誠宏 仲澤 剛史
Tsewang Namgail 西村 欣也
仁科 一哉 Ariel Novoplansky
大橋 瑞江 岡部貴美子
大園 享司 Pil Sun Park
Nishanta Rajakaruna Serena Rasconi
Sergio R. Roiloa
Samuel R. P. -J. Ross
斎藤 琢 坂田 ゆず
佐々木雄大 佐藤 一憲
佐藤 拓哉
Stephen D. Sebestyen
Bo Song Janne Sundell
高田まゆら 高田 宜武
高木 俊 高巢 裕之
Cindy Q. Tang Arndt Telschow
角田 裕志 内井喜美子
Edward Vargo Ping Xie
山尾 僚 安田 仁奈

日本生態学会誌編集委員会（2023.1 ～ 2025.12）

編集委員長 永光 輝義
編集幹事 安房田智司 相場慎一郎
小林 剛
編集委員 伊東 明 三宅 崇
高田 宜武 箱山 洋
村上 貴弘 笠原 玉青
大澤 剛士 山浦 悠一
草刈 秀紀 嶺田 拓也
白川 勝信 東樹 宏和
佐久間大輔 保原 達
松林 圭 立木 佑弥

富田 涼都	坂田 ゆず
竹内 やよい	都野 展子
鈴木 重雄	島野 光司

保全生態学研究編集委員会 (2021.1 ~ 2023.12)

編集委員長	小池 文人	西廣 淳
編集幹事	丑丸 敦史	赤坂 宗光
編集委員	天野 達也	市野川桃子
	石濱 史子	大澤 剛士
	岩井 紀子	片山 直樹
	岡野 隆宏	金子 信博
	角谷 拓	岸本 康誉
	河口 洋一	楠本 良延
	北村 亘	五箇 公一
	小池 伸介	今藤 夏子
	小山明日香	佐々木雄大
	佐伯いく代	曾我 昌史
	鈴木 覚	立原 一憲
	高田まゆら	東城 幸治
	露崎 史朗	中濱 直之
	戸田 光彦	松崎慎一郎
	根岸淳二郎	山浦 悠一
	森田健太郎	
	横溝 裕行	

自然保護専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	和田 直也：中部
副委員長	奥山 雄大：関東
	大久保奈弥：海洋
	関島 恒夫：気候変動対策と環境影響

幹事 神山 智美：環境法

地区選出委員

露崎 史朗：北海道
早矢仕有子：北海道

星崎 和彦：東北
黒沢 高秀：東北
亘 悠哉：関東
増田 理子：中部
古賀 庸憲：近畿
中井 克樹：近畿
岡 浩平：中国・四国
伊谷 行：中四・四国

久保田康裕：九州
高嶋 敦史：九州
平田 令子：九州
増沢 武弘：高山・亜高山
竹門 康弘：陸水
加藤 真：海洋
清水 善和：島嶼
久保田康裕：熱帯・亜熱帯
横畑 泰志：寄生生物
阿部 晴恵：遺伝子
常田 邦彦：鳥獣管理

専門別委員

矢原 徹一：海外渉外
安溪 遊地：エネルギー問題
角野 康郎：湿地
水谷 瑞希：MAB
五箇 公一：環境行政（外来種）
吉田 正人：環境政策（自然公園／種の保存法）
村上 興正：環境政策（外来種）

将来計画専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	佐竹 暁子	巖佐 庸
副委員長	酒井 章子	石井励一郎
	辻 和希	小泉 逸郎
	粕谷 英一	三木 健
	田中 健太	塩尻 かおり
	立木 佑弥	黒川 紘子
	北島 薫	山道 真人
	彦坂 幸毅	石川 麻乃
	土居 秀幸	大竹裕里恵
	佐藤 拓哉	矢原 徹一
	鈴木 貴俊	
	藤岡 春菜	

生態学教育専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	中田 兼介	
副委員長	丑丸 敦史	
非教育学部系枠：		
	嶋田 正和	畑田 彩
	西脇 亜也	
教育学部系枠：		
	平山 大輔	三宅 崇
	中井 咲織	佐賀 達矢
高校教員枠	宮田 理恵	矢追 雄一
博物館枠	澤邊 (中村) 久美子	小林 誠

大規模長期生態学専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	大手 信人	
	石原 正恵	伊東 明
	内海 俊介	黒川 紘子
	木庭 啓介	中野 伸一
	中村 誠宏	村岡 裕由

生態系管理専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	西廣 淳	
副委員長	鎌田 磨人	吉田 丈人
幹事	橋本 佳延	
	(キャパシティビルディング部会担当)	
	西田 貴明 (調査・提言部会担当)	
キャパシティビルディング部会：		
	赤石 大輔	伊藤 浩二
	上野 裕介	大野ゆかり
	大脇 淳	上崎 聰敏
	白川 勝信	矢原 徹一

調査・提言部会：

岩崎 雄一	大澤 隆文
小笠原奨悟	佐々木章晴
高川 晋一	高村 典子
中村 太士	古田 尚也
松田 裕之	山下 慎吾

日本生態学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞選考委員会

石川 麻乃	大橋 瑞江
森 章	鈴木 俊貴
鈴木 牧	辻 かおる

大会企画委員会

委員長	大澤 剛士	
副委員長	高橋 一男	
運営部会	小林 卓也	橋本 洸哉
	高野 (竹中) 宏平	京極 大助
	境 優	松岡 俊将
	立木 佑弥	田邊 晶史
	才木真太郎	

シンポジウム部会

徳田 誠	佐藤 永
大館 智志	平田 晶子
今田 弓女	田村 大也
栗原 洋介	渡部俊太郎
野田 響	東 若菜
井坂 友一	今井 伸夫

ポスター部会

平野 尚浩	西嶋 翔太
長谷川成明	平山貴美子
松橋彩衣子	山下 聡
島田 直明	樋口裕美子
柴田あかり	小出 大
友常 満利	田路 翼

高校生ポスター部会

勝原 光希	山崎 曜
坂田 ゆず	酒井 聡樹
桜井 良	佐賀 達矢
藤岡 春奈	望月 昂
中濱 直之	

発表編成部会

松崎慎一郎	富松 元
源 利文	森 英樹

英語口頭発表部会

上村真由子	福森香代子
水元 惟暁	小林 真
門脇 浩明	塩尻かおり
畑 啓生	

(オブザーバー)

辰巳 晋一	森井 悠太
入谷 亮介	

オンライン部会

深谷 肇一	境 優
-------	-----

(オブザーバー)

細 将貴

野外安全管理専門委員会

委員長	石原 道博	2022.4 ~ 2024.3
	鈴木準一郎	2022.4 ~ 2024.3
	粕谷 英一	2022.4 ~ 2024.3
	北村 俊平	2022.4 ~ 2024.3
	飯島 明子	2023.4 ~ 2025.3
	奥田 昇	2023.4 ~ 2025.3
	中島 啓裕	2023.4 ~ 2025.3

キャリア支援専門委員会 (2022.4 ~ 2024.3)

委員長	上野 裕介	
副委員長	高野 (竹中) 宏平 (男女共同参画)	
副委員長	成田 あゆ (キャリア支援)	
	河内 香織	鈴木 智之
	曾我 昌史	西田 貴明
	沼田 真也	高田まゆら
	宮脇 成生	東樹 宏和
	木村 恵	鈴木 牧
	小泉 逸郎	荒木希和子
	中臺 亮介	諸澤 崇裕
	幸福 智	

(オブザーバー)

可知 直毅	黒瀬奈緒子
塩尻かおり	富田 基史
半場 祐子	森田健太郎
別宮 (坂田) 有紀子	三宅 恵子
寺田佐恵子	

情報交流支援専門委員会 (2021.4 ~ 2023.3)

委員長	村岡 裕由	
	大澤 剛士	長谷川 功
	森田健太郎	津田 吉晃
	深谷 肇一	

男女共同参画学協会連絡会幹事学会タスクフォース

(2022.3 ~ 2023.12)

委員長	半場 祐子	
副委員長	可知 直樹	三宅 恵子
	池本 美都	宇野 裕美
	久野 真純	斎藤 裕美
	Firouzeh Javadi	曾我 昌史
	Hubert Cheung	堂園いくみ
	藤田 剛	本郷 峻
	満行 知花	三谷 曜子

(オブザーバー)

木村 恵	上野 裕介
高野 (竹中) 宏平	

理事会連絡担当

赤坂 宗光

英文誌出版タスクフォース（2022.3～2023.7）

委員長	久米 篤	
	大塚 俊之	本庄 三恵
	陶山 佳久	鈴木準一郎
	富松 裕	黒川 紘子
	楠本聞太郎	角田 智詞
	大原 雅	山内 淳
	三宅 崇	

データベース検討タスクフォース（2022.3～2023.9）

委員長	内海 俊介	
	大澤 剛士	大手 信人
	久米 篤	黒川 紘子
	佐々木雄大	陶山 佳久
	村岡 裕由	

ESJ71 運営検討タスクフォース（2023.3～2024.3）

委員長	吉田 丈人	
	宮下 直	北島 薫
	立田 晴記	赤坂 宗光
	辻 かおる	大澤 剛士
	高橋 一男	小池 文人
	鏡味麻衣子	佐々木雄大
	占部城太郎	細 将貴
	彦坂 幸毅	大塚 俊之
	小泉 逸郎	

Center for Ecological Research NEWS



京都大学
生態学研究センター

Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel: (077) 549-8200 (代表), Fax: (077) 549-8201
センター長 中野 伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page: <https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2023年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2023年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

なお、新型コロナウイルスの影響により本稿に掲載されている予定については変更の可能性があります。ご了承ください。

1. プロジェクト

創発的研究支援事業 (JST) (2件)、連携研究スキームによる研究 (農水省) (1件)、科学研究費助成事業による研究 (45件)、民間財団寄附金による研究 (5件) などが進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2023年度の共同利用・共同研究事業 (予算措置のあるもの) として、分野間の交流や若手研究者育成の観点などから、9件の共同研究a、3件のワークショップ、1件の研究集会を採択した。ワークショップの開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

また、共同研究b・資料利用は随時募集を行う。

4. 生態研セミナー

生態学研究センターの公式のイベントである「生態研セミナー」を毎月第三金曜日に開催している。本セミナーは、講演者と世話役の教員との協議によって、(1) 生態学研究センターにおけるセンター外の方々も参加可能な対面形式か、(2) 主に Zoom を用いたオンライン形式のいずれかの形で開催する。どちらの場合も、講師の同意が得られる場合には、主に Zoom を用いた外部へのオンライン配信も併せて行う。オンライン配信実施の可否はそれぞれのセミナーで異なるので、詳細についてはセンターホームページでご確認ください (なおオンラインでの視聴には事前申込が必要です)。また、生態学研究センターにて開催の対面形式のセミナーへの参加を希望される場合、会場への道順はセンターのホームページで確認いただけます。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、年2回 (7月、1月) 発行する予定である。原則として冊子体の発行はせず、センターのホームページにて内容を公開し、希望者には発行のお知らせをメール配信する (次頁にメール配信登録の URL 掲載)。ただし、公的機関等へは冊子体版をお届けする。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

3月30日に、大学院入試案内のためのオープンキャンパスを開催した。

京都大学では、遠隔地教育研究施設による公開講座等を集中して実施する京大ウィークスを毎年行っている。センターはその一環として秋頃に、一般公開「学校で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。日程などはセンターホームページに掲載し周知する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転写定量解析用機器など、安定同位体関係では、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置 (元素分析計)、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置 (熱分解型元素分析計)、GC/C (ガスクロ燃焼装置付き前処理装置)、高速液体クロマトグラフ付き前処理装置を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus と、PreCon-GasBench II (自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス)、元素分析計、GC/C を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計2台が稼働している。

琵琶湖観測船: 高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼働しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地 (下阪本) に係留されている。

実験圃場林園: センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に以下の担当者
者に連絡してください。

DNA シーケンサー等関係：工藤・本庄

安定同位体関係：木庭

観測船関係：合田・赤塚

実験圃場林園関係：工藤

8. 運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

● 2023 年度 共同研究 a・ワークショップ・研究集会 採択申請一覧 ●

申請者	所 属	申込内容	研 究 課 題
清水 (稲穂) 理恵	Department of Evolutionary Biology and Environmental Studies, University of Zurich	共同研究 a	倍数化によるエピゲノム進化と環境適応
髙谷 匠	総合研究大学院大学・統合進化科学研究センター	共同研究 a	安定同位体分析による野生ボノボの食性推定
篠崎 真希	福島県環境創造センター・研究部	共同研究 a	猪苗代湖に流入する酸性河川の硫酸イオン起源解析
牧野 渡	東北大学大学院・生命科学研究所	共同研究 a	琵琶湖におけるマルミジンコ (<i>Chydorus</i> 属) の種遷移に関する研究
鈴木 啓太	京都大学・フィールド科学教育研究センター (舞鶴水産実験所)	共同研究 a	冬季の降水パターンが沿岸植物プランクトンに与える影響
荒木 希和子	滋賀県立大学・環境科学研究所	共同研究 a	植物地下部の環境応答性に関する研究
木下 こづえ	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科	共同研究 a	ゾウおよびマンモスの適応的健康カレンダー：毛中コルチゾールと安定同位体分析
三谷 曜子	京都大学・野生動物研究センター	共同研究 a	北海道周辺海域に來遊する鰯類の摂餌生態に関する研究
福島 慶太郎	福島大学・農学群・食農学類	共同研究 a	急速に中性化した火山性酸性湖・猪苗代湖における安定同位体比を用いた窒素動態
中野 伸一	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	脱窒菌同位体比測定法ワークショップ 2023
木庭 啓介	京都大学 生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2023
本間 航介	新潟大学 佐渡自然共生科学センター 森林部門	研究集会	佐渡の森林生態系および森里海の物質循環に関する現地研究集会

2022 年度 センター受賞者

受賞者名	受賞名	受賞研究課題・受賞講演名・受賞論文等
高林 純示	第 20 回 (2022 年) 日本生態学会賞	化学コミュニケーション研究の世界的第一人者として、これまでの実績を評価され受賞した。
佐藤 拓哉	公益財団法人河川財団 令和 4 年度河川基金優秀成果賞 (研究者・研究機関部門)	「河畔林整備がサツキマスになる稚魚の個体数増大に及ぼす効果の検証：河川管理と森林管理の融合に向けて」
大坪 雅	2nd Plant Microbiota Research Network (PMRN) 2022 Best Poster Award	"Effects of Turnip mosaic virus infection on preference of aphids in <i>Arabidopsis halleri</i> in a natural environment"
程木 義邦 (中部大学応用生物学部・准教授) 小坂橋 忠俊 (前・生態学研究センター・技術専門職員) 合田 幸子 赤塚 徹志 中野 伸一	日本陸水学会英文誌 "Limnology" 最優秀論文 (Limnology Excellent Paper Award 2022)	Hodoki Y, Koitabashi T, Goda Y, Akatsuka T, Nakano S (2020) Long-term variation in abundance of the non-native phytoplankton <i>Micrasterias hardyi</i> (Zygnematophyceae, Streptophyta) in Lake Biwa, Japan. <i>Limnology</i> 21 (1): 67-72.
大坪 雅	第 70 回日本生態学会大会ポスター賞 最優秀賞	「カブモザイクウイルスが植物-アブラムシ相互作用に与える影響と介在遺伝子の探索」
景山 拓矢	第 70 回日本生態学会大会動物群集部門ポスター 優秀賞	土壌生態系における微生物群集の相互作用ネットワーク動態

センターニュース メール配信登録のお願い

センターニュース発行のメール配信登録、配信先の変更、配信停止等をご希望の場合は、インターネット上の以下のフォームより必要事項のご入力をお願いいたします。

<https://ws.formzu.net/fgen/S75832635/>

センターニュースはバックナンバーを含め、センターホームページの以下の URL からご覧いただけます。

<https://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/newsletter.html#ct3>



◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は9～12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

退会する際は前年12月末までに退会届を会員業務窓口まで提出してください。

会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	基本会費 *	大会発表	選挙・被選挙権 (役員・代議員)
正会員（一般）	9500 円	○	○
正会員（学生）	4500 円	○	○
賛助会員	年会費 20000 円／22000 円	×	×

*生態学会では収入の少ない一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施しています。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

【論文投稿の権利】

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ・日本生態学会誌 | 正会員のみ有 |
| ・保全生態学研究 | 投稿権利は会員に限定されません |
| ・Ecological Research | 投稿権利は会員に限定されません |

【冊子配布を希望する会誌の追加費用】

- | | |
|----------------------|---------|
| ・Ecological Research | 8,000 円 |
| ・日本生態学会誌 | 2,000 円 |
| ・保全生態学研究 | 2,000 円 |

【非会員に向けた学会誌(冊子体)定期購読料】

- | | |
|----------|---------|
| ・日本生態学会誌 | 5,000 円 |
| ・保全生態学研究 | 5,000 円 |

問い合わせ先：一般社団法人日本生態学会 会員業務窓口

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター

E-mail: esj-post@as.bunken.co.jp

Tel: 03-6824-9381 Fax: 03-5227-8631